

おきて引よするに、牝馬なりければ、子ありて母馬につきて來たり。まだ乳を呑むなりけり。さて是れはいかゞはすると言ふに、母につきて來べしと言ふに、歩まじと言へば、馬は生れて十日を経れば一里、廿日をふれば二里は歩む、こは生れて一月を経たれば、五里六里は安く歩むべしと云ふ。あはれがりつゝもその親馬に乗りて行くに、子もつきて來る、いとかなし。その人にかはりて』

われさへに歩む身ならば馬の親を乗らでも引き  
て行かましものを

動物ならぬ橋柱をも彼は同情の目を以て見てゐる。

夜を寒み川風あたる橋ばしら人ならねばぞさも  
立てりける 江の流るる

又、松の碎かるゝを傷んでは、

山松の板さく音のあぢきなさ千歳も千々に切り

碎くやと

而して彼には或は貧苦を嘆き、貧苦に同情し、貧苦を歌つた歌が多くある。玄かもそはいづれも彼の木下幸文の貧窮百首の如く、悲痛なるものでなくて、例の飄逸洒落な風がある。

あはせては又とき放つ古衣かくてぞ春も秋も經  
にける

折々はさらぬ家にも行きねかしいつより來ぬる  
身のまづしさぞ(貧)

おくまりし家をぞもたる蝸牛わが淺ましきふし  
どには似す

我身こそ何とも思はね妻子らの愛してふなべに  
憂き此世哉(歎世)

行けば行く方に従がふ杖と笠これのみ我れにつ  
 かへ人なる  
 いつしかと空しくなりて降る雪の寒き夜にたく  
 炭俵かな  
 親なけば子さへ泣くなり世中のせむすべなきも  
 何も知らずて  
 聞きすてゝ飯たく親の見ぬ間にも聲の限に泣く  
 うなる哉(貧家)

清貧に安んじてゐた面影の見えるには、

貴人きじんにあらねばこそは安く見れ花といへば花月  
 といへば月  
 そとも田の十まち二十町我宿のものがほにいて

人のものなる

さすがに不平の念を洩らしては、

あたひにもなる時なく、我園のやせたる竹の世  
 の寒さかな

言ひ方が如何にもうまい。殊に結句が。

彼は人事に於いては老幼を好んで詠んだ。殊に子供は彼の得意の題目である。歌人中彼ほど子供を詠んで成功したものは無い。彼の歌には子供の無邪氣さや、愛らしさが如何にも巧みに詠んである。まづ、老を詠んだのから擧げると、

老らくのいにしへがたり古へは同じ事のみあり  
 しばかりに  
 何事かいひさして末は忘らるゝ老こそ老の心な  
 りけれ

松の老いたるを歌うては、

老ぬれば松の葉さへもおのづから打すげみたる  
面顔にして

幼き子供を詠んだのには、或は子供の平生を歌つて、

答へするこゑ面白み山彦をかぎりもなしに呼ぶ  
童かな

物かげにかくれあふなるわらはさへ遊びあまれ  
る日の長さかな

たわらはの物をふこともことわりに寂しさ長き  
春雨の空

何事か遊ぶ遊ばぬいさかひも泣くぞかぎりのわ  
らはべのとも

木間よりいかに聞くらむ童へのすさびにまぬる

鶯のこゑ  
さし柳さして幾日も経ぬものを根ざし引見る友

わらは哉  
中たえてえも渡られぬ川橋を行かるゝ迄は行く

わらは哉(斷橋)  
いづれも子供の子供らしいところが、如何にもよく詠んである。又次の如きもある。

幼きも又幼きをなつかしみ鶏の子抱く里のたわ  
らは

幼げも早なくなれる童さへ背に負はるゝや樂し  
かるらむ

泣くものは大人にならじ泣くものは柿も與へじ

梨も興へじ(童謡)

負はれた子を見ては、

いくばくの劣りまさりも見えぬ子の負へる負は  
るゝ哀なる哉

賤のめが背に着こめたる幼子の諸手にもたる山  
吹の花

寝た子の様を詠んだのには、

歸り来てねたる童の袂よりごぼれいでたる花莖  
かな

童への枕のもとのいかのぼり夢の空にや舞ひあ  
がるらむ

此いかのぼりの歌もさうであるが、子供の玩具を詠みこんだのには、

妹が背にねぶる童のうつゝなき手にさへめぐる  
風車かな

童への手まさぐりにも舞ふ獨樂の目もまふばか  
りいとまなの世や

彼は又親子に就いて歌つた。

あけぬれど親の心の暗のうちに朝いせさする家  
の少女子

子をねする親もねぶりて灯火の獨さやかに更く  
る夜半かな

更に動物の親子を詠んだのがある。

まだしくもまだ見ゆる子を親がらす飛びならは  
しにさそふなる哉

おのが身にまがふばかりもなれる子を猶はぐく  
める親がらすかな

先だちて山路すぎ行く牛の親に子牛より来る村  
時雨かな

己が子の巢立さそひて野の雲雀手も及ぶべき空  
にてぞなく

つばくらめ親まちわびて並べれば我も遅しと見  
る軒端かな

親の身にのする子猫のおとがひもうつゝなげな  
る身の寐さまかな

庭つ鳥おのが羽がひの狭ければくゝみあまれる  
雛の數かな

竹の子の親子にさへ同情して、

何とかや人心地して親のもと引放ちうき園の竹  
の子

彼は又好んで櫻の花を詠んだ。古來歌人にして櫻花を愛しかつ詠まぬ人はないが、  
言道ほど真に之を愛し之を詠んだ人は少い。その偶を求むれば彼の西上人であらう。

近く見て遠く見て又櫻花いかさまにてもあはれ  
なるかな

唯一枝かげの枝をと人は言へど折る方なげに見  
ゆる花かな

あかずして歸りし故か思ひ寐の夢路につゞく花  
の山みち

覺めぬれど夢に見えつる花の枝とらへながらに

ある心地かな  
手折つる跡みぐるしき花の枝なりあふまでは如  
何に久しき  
何故に風の神にはあたまれて散らさでおかぬ櫻  
なるらむ  
居ならびて見る花なれど面白き枝の蔭にはわが  
身ありけり  
咲く花にあくがれいでていつしかと家籠をもす  
つるばかりぞ

花の歌には特に擬人法が多く用ゐられた。

なつかしと折るをいなびて花の枝汝が方さまに  
ひく景色かな

おそかれと聞えあはせしものがほにいつこも花  
の咲かぬ春かな  
咲く花も老いぬるまゝに人なれてなよびやはら  
ぎたるゝ枝かな  
折りとるは嬉しからじを櫻花世の中さまにゑめ  
るがほなる  
思ひねの心のほどのとどけらばこなたの夢も花  
や見るらむ  
待ちかねてはいだたいくもなる人を咲きて笑ま  
する花ざくらかな  
待つ花の待つ人ならば幾ばくの遠き國より來た  
るなるらむ

彼は又酒を嗜んで、酒の歌が多い。彼は旅人卿の流を汲んでゐる。まかもその酒の歌が、いづれもさつぱりしてゐる。

なき時はなくて幾日か過ぐすらむある日は酒の  
あるにすぎつゝ

野邊さむきかへさも楽し我宿にかみたる酒も残  
りありやと

酒あれば心もちひもつかずして年の暮ともなき  
いほりかな(年の暮に人の來て此處は餅は無きにやと言ひける折しも盃とりて  
ありければ)

水に身をはめても今夜面白き心は何のなさけな  
るらむ(酒に酔ひて川に陥りてよめる二首)  
何をかも落しかせしと水見れば底に残れる片わ

れの月

後の二首は李白を思ひよそへたのである。

今日は今日あらむ限は飲み暮らし明日のうれひ  
は明日ぞ愁へむ

わが如く酒に酔ふらし音たてゝうてばうつ手を  
まぬる山彦

この二首は、如何にも酒を楽しみ酒に興じてゐる心が現はれて面白い。彼の酒の歌  
中の秀逸である。

彼と時代を同じうし、同じく眞淵景樹の流派以外に立つて、一新歌風を詠み開いた  
井手曙覽も又酒を嗜みて、酒の歌が多い。曙覽の歌の雄々しさは言道には無いが、そ  
の飄逸の趣は兩者似てゐる。曙覽に『夕烟今日は今日のみたてゝおけ明日の薪は明日  
探りて來む』と云ふのがあるが、こはまさに言道が此、今日は今日の歌と類想である。

而して曙覽の酒の歌には下の如きがある。

とくく　とたりくる酒のなり瓢嬉しき音をさす  
るものかな

菊かをる籬の下に酔たふれ南の山のから歌うた

ふ

樂しみは客人得たる折しもあれ瓢に酒のありあ  
へる時

床になくこほろぎ橋を横に見て酔たふれたる寐

心地のよさ(高瀬川といふ所に人々と川道遙に行きて)

酔人の水に打入るゝ石つぶてかひなきわざに臂

を張るかな(同じ時人々酔ひくるへるまゝに、大きな石などを力を出して抱き  
もたげ、川中へ打入れて興ありげにするを見て)

對照して來ると同じく酒の詩趣を詠んで、自ら別種の特徴を示してゐるところが面白。

最後に、彼の歌の言ひさまの一風變つてゐる例として談話體の歌を挙げれば、

聞えずはなほ聲高に道問はむこなたにゆくや志

### 賀の山越

古くは萬葉集なる『梅の花夢に語らくみやびたる花とあれもふ酒にうかべこそ』『石  
磨にわれ物申す夏瘦によしといふものぞむなざとり食せ』『寺々の女餓鬼申さく大神  
の男餓鬼たばりて其子うまはむ』を始め、近くは景樹の『めせやめせ夕けの妻木早く  
めせ歸るさ遠し大原の里』『蝶よく花と言ふ花の咲く限汝が至らざる所なきかな』曙  
覽の『雨ふれば泥ふみなづむ大津道我に馬ありめさね旅人』などの類であるが、言道  
のは『こなたに行くや』の句に、いかにも笠傾けてゐる旅人の面影が活躍してゐる。  
なほ抄出したきものが多くあるも、類はしきを避けてこれに止める。要するに彼の



歌風の特長は前にも述べた如く、構想、用語、句法の陳腐ならずして新しく、在來の和歌に見ざる輕妙の趣ある點に存する。而して彼の歌風のかくの如き特色は、古來の和歌の一種重くるしき風に對して和歌の歴史上異彩を放つてゐる。元來和歌は萬葉集時代は暫らくおくも、古今以來上流社會の間に専ら流行した結果、その間一種の重くるしさを養ひ來て、終にこれが性となつた傾がある。和歌の用語句法はた構想に正雅といふ事を重んじて、そのあまりに、或は陳腐になり或は窮窟になるの弊に陥つた。徳川時代になり多くの歌人が出たが、眞淵一派はもとより、景樹一派といへども、未だ全くこの重くるしさを破るに至らなかつた。『大宮人の束帶したやうな歌』と言つて在來の歌風を批評したのは、實にこの重くるしきから脱せむとしたもので、彼の歌風が一種面目を新たにせるは、この故である。これ歌人として言道の偉なるところである。

## 野村望東尼

歌は人の心を種として萬に咲き出づる花なれば、その詠める人の人と爲り、心ばへをあらはす事、たとへば濁れる井より出づる水の濁り、澄める井より出づる水の清きが如くなるべきものから、世の事わざ、人の心のはたらきなど複雑になりもて行くにつれて、歌よむ事もまた一つの異なりたる業となり、殊更に學び習ふすべさへ出できぬれば、あるはその心ばへ優しくして強く雄々しき歌よみ出で、あるは又くだれる世にありてひたすらに上つ世のふりなどうたふもありけり。これらみな技術としてはまことに進歩の結果として喜ぶべく、おのがじしさを方に趣あるものなれど、その弊として、歌のさま殊更めきて、彼の造り花の生氣なきが如きにいたりたらむには、中々に厭はしかるべし。題詠といふ事専らになり來しよりこの方、殊にわが國の歌のおしなべての弊は、まことにこれにはあらずか。さるをその歌のいづれにも、作者の眞心あ

らはれ、作者の性情境遇などの相映りて、夕暮の水の夕日の光をおびて流れゆく如くなるを見るぞ、もとも感深かりける。況してや其歌人の性情、その閱歴、世のつねならぬきはなるをや。わが野村望東尼の如きは、誠にこの類にして、近世稀に見る所なりけり。

望東尼は筑前福岡の人、文化三年浦野勝幸の三女として生る。容うるはしく、歌をよくし、書に巧に、裁縫刺繡のわざにもたけたりしが、同藩の士野村貞貫の、詩歌の嗜深く、正義廉直の士なるを聞きて、先妻の子三人あるをも厭はず、野村氏に嫁ぎて、よくその家を治め、先妻の子をおほしたて、一家和合春風の吹くが如くならしめぬ。のち家を長男に譲りて、平尾村のほとり、静かなる境に世を避けしに、安政の四年と言ふに夫世を去りしかば、剃髪して佛の道に入り、その名、もと女を望東尼と改めぬ。當時幕府の専横甚しく、時勢の日に非なるを見るにつけても堪へがたく、密かに交を志士に結び、あるはその山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひなどして、真心を盡しぬ。されば、彼の僧月照が薩摩へ下りし時はその山莊にやどし、又平野國臣、高

杉晋作等を山莊に潜ましめ、其危きを救ひて、ねもごろにいたはり、また大宰府に幽囚せられし三條公に謁しなどしたり。かゝる事つもりくしかば、終に罪を得、捕はれて浪風あらしき玄海洋の一孤島、陸地を距る五里の沖なる、姫島の牢獄に込められぬ。そこにあること二年。身を容るべきはわづかに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中に、かよわき老の身の押しこめられて、暑さ寒さを忍び居しに、彼の高杉晋作は、その舊誼に報ゆべく、同志を遣りて姫島の牢檻を破り、望東尼を奪ひて長門に渡れりしかど、老軀長く堪ふるを得ず、維新の大業成るを見ずして、慶應三年十一月六日、年六十二歳にて、病の爲に空しくなりぬ。女ながらも、皇國のおん爲大君のおん爲に心を碎き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵し、あるは同志の間に入りて互の志を通せしめしなど、其心づかひなみくならず、まことにその一家の良妻賢母なりしが如く、隠に維新大業の良妻にして、また賢母の一人なりき。その一生の閱歴かくの如く、さながら一篇の詩なり。

まかも忠誠もゆるが如き真心を緯とし、感じ易き優しき女心を經として、すぐれたる才をもて、この間に織りなしたる歌文の錦、いかで世の常なるべき。

彼の著書として重なるものは、歌集向陵集と、姫島の牢獄にて記し、姫島日記となり。後者に於いては歌はその半ばを占む。彼が歌は、或は悲憤慷慨、憂國の至情あふれて、句々皆血涙の跡をとむるあり。或は優麗閑雅、やさしき鶯の初聲をきくが如きあり。まかもこの兩面を相むかへ見て、初めて其すぐれたる人となりをも知り、その歌のまことの趣をも解しつべく、たけく雄々しきが中にも、さすがに弱き女心のあるあり。あはれに優なる中にも、なよ竹のたわみながらに強きところあるを知り得べし。かつや、其歌の調の清新なる、その觀察の奇警なる、又よみさまの巧みにして手のきたるその修辭に、用語に、自由輕妙にして、その師大隈言道さながらなるあり。もとより生具の天才ならむも、又よく師を學びて堂奥に達せしものにあらざらむや。以て其修養の淺からざりしを知りぬべし。而して其歌の慷慨悲憤の一面は、これ彼が境遇

性情より得來りしところにして、言道が和歌には見ざるなり。これを近世の女歌人として世に知られたる太田垣蓮月と比べみるに、その歌のいづれも真心より流れいでたる調にして、軽く浮きたる風なきは相似たるべく、まかも其趣を異にせる所、やがてその性情と境遇との異なる所にして、彼は單純にして、たとへば清き里川の水の、野末を靜かにますますに流れゆくにも似、これは複雑にして深山のはさまを行く谷川の、時には岩にせかれてはげしき響をなし、時には木かげにたゆたひて寂しき音をたつるにも似たらむか。

向陵集姫島日記の二篇は、明らかに望東尼が女歌人として、また優に近世の第一流に位すべく、古來の歌人の中に於いて、たしかに一異彩を放つべきを證して餘あり。なほ其著には、文久元年京師にのぼりて鳳闕を拜がみ、檀原神廟にも詣で、師なる言道の大阪に移り住めるをも訪はむとて上京せし折の上京日記。及び最後に記し、防州日記などあり。いづれもその文に、その歌に、あはれなるもの多し。又その國事に關

して往復せる書翰のうちにも、望東尼が熱誠の情あふれ、吾人をして感激せしむるものはた少なからず。

望東尼は、從來勤王家として傳へられしのみにして、彼が歌人たる面目は、未だ世に知られざりき。われ、先に姫島日記を讀みてその歌に感じ、こたび又そが家集向陵集を讀みて、いよくその推獎すべき女歌人なることを知り得たり。望東尼をわが歌壇に紹介することは、我が大なる喜びとする所なり。

### 附録 望東尼の歌

向陵集は、未だ世に公にせられず。姫島日記は、明治二年出版せられしも、多く傳はらず。従つて彼の和歌は未だ世に知られざれば、左にすぐれたる作を抄出して、彼が歌才の一端を示すこととなしぬ。序でに維新史料に採録せる、上京日記、夢かぞへ、防州日記等よりも抄出せり。

三を花園、  
ひよりのつらさ

### 向陵集抄

折にふれたる

暫しだに物は思はじそのまに、柳はもえて梅は散りけり、  
 梅の花散りしく庭の昔の上に今更めきてふる歌かな  
 さ歳のもゆる焼原ちかながら折にゆく問もなき長雨かな  
 春雨の軒にそぼふる音ききてさめしながらのわがあさいかな  
 鶯も羽ねをひそめて咲く花に心をまたる枝うつりかな  
 わが宿の花一本をかなたよりこなたより見て過す春かな  
 櫻花枝垂れて咲く窓の戸をたてながら織る襪の音かな  
 櫻咲くかけともいはずつく日の響にゆらぐ花もあやふし  
 さくら花多く匂へる里にても友なき人はさびしからまし  
 散る花をかへり見もせぬ柴人のつらき心ぞうらやまれける  
 窓近きまがきの椿花ごとにあなたむきてもさき出づる哉  
 まし水にうつるも知らで山吹の花に隠れて眠る蝶かな  
 窓近く枝うち垂れしねむの木にわがさそはる夢心地かな

野村望東尼

月影のうつるを見れば程もなき盥の水も千尋なりけり  
 片枝のみ色づく見れば同じ木の枝だに心ひとしくやなき  
 世の中のうき事知らぬみ佛も物さびしらに見ゆる秋かな  
 廣き野にわかれも行かて雁がねのあさり争ふ小田の落ち板  
 茹れる田の畔にふしたるそほづかなもる業はてし心安さに  
 道遠くゆきてかへりてけさの事思へば冬も日長かりけり  
 なづみなく湧き出づる庭の清水には薄氷だにも結ばざりけり  
 人かけを雪間に遠く見出つゝわが訪はるゝにさだめてぞ待つ  
 行く年を惜みもあへず世の人の騒げる見れば哀なりけり  
 わりなくも世に生れくるその日こそつひの旅路の門出なりけれ  
 白浪に打ち砕かれて岩角も磯のさざれとなる世なりけり  
 川の瀬に洗ふかぶらの流れ菜を追ひ争ひてゆく家鴨かな  
 海士をとめかりほす磯のあらめにも幾人つなぐ命なるらむ  
 中々に嬉しき芽よりうき草の萌えいで初むる世にこそありけれ  
 山柿の花とも見えぬ花見ればみのほどくゞにさかりありけり  
 入れぬべき物もなくして徒らに所ふたぎのれやのからびつ

愚なる心を放むるわが心いつれもおのがしものなるが憂  
 舟にしてきのふ憂かりし白波もいづかに見ゆる今日の山越  
 朽ちながらあせきにたてる古杭の危ふき瀬にも年経ぬるかな  
 あす知らぬ人のすみかを作るとて千歳の松も板にさく世か  
 庭にある石を此方に彼方にと心ばかりの動くわりなさ  
 世のうさをとり入れぬべき袋もが口ゆひはてし野に捨てましな

春の暮るゝ日に

春のごと短きものはなかりけりいづれの年か長しと思ひし

木 立

昔わが間遠に植し梅さくらかへでも枝をさしかはし來ぬ

の も と

道のべの並木の松のかげだにもしさかゆるかたに人の集へる

猿 引

引く人も引かるゝ猿も馴れにけり親とや思ふ子とや見るらむ

幽 籠

ありてだに遊れまほしき世の中をなき人いかで離れがてなる

野村望東尼

今年八月ばかり、相州浦賀といふ所に、異國船とありけにきたりて、國々の守を大江戸より召し給ふとて、公けにものぼらせられける頃、いと物騒がし。少し静まりがたなるに、はた長崎にも同じさまの船來りしとて、こたびは若殿かしこに出でたゞせ給ふなど、上を下にと騒ぎあへり。

異國の船はうき世の浪立てて、いどみ顔にいうち寄せしかな。

安政二乙卯十月二日の夜に、大江戸大地震にて、大殿をはじめ參らせ、國々の守の御家居、御社、寺々、人の家はいふも更なり、倒れ伏し、或は焼け失せなどして、焼け死に、打たれ死にたる人、幾萬ともいふばかりもなしと、ことごとくしういふに、たひらけき道失へる世の中をゆりあらためむ天地のわざ。

天地の神の心やさわぐらむ秋つ島根の道の亂れに

せの君の御病、七月のはじめよりおどろくしう見え給ひて、末つ方いと心細けくなり給へば、夢うつともわかて明し暮しける頃。

初秋の風にふかろいともし火の影も心もほそる夜半かな

世のさまあぢきなかりける頃。

消えもせずもえたちもせて蚊遣火の烟いぶせきよのけしきかな  
せの君の一めぐりのとぶらひして、ありし世の事ども人々語り合へる時。

ともすれば君のみけしきそ、こなひて叱られし世ぞ今は戀しき

やき山を越けるに、大木の松の倒れ伏したるが、皮ののきて白くなりたるに書いつけたるを見れば、「岩が根の碎けてさめよ物のふの國の爲とて思ひきる太刀」薩摩の藩中右村治右衛門とあるをみて、こは三月三日櫻田にて水戸士と共に命を捨てられし人ぞかし。かゝること思ひたちて江戸にゆく時、此道や通りけんなどいひつゝ見て、

岩が根の碎けても猶さめやらぬ夢の行末思ひこそやれ

國臣といふ人のとらはれしを歎きて、ひとやにおくりける。

類なき聲に鳴くなる篋も籠にすむうき目見る世なりけり

このみ

數ならぬ此身は昔にうもれても日本心のたれはくたさじ

あゝる時

なき世にはそま木とならむわがうゑていたはる庵の花も紅葉も  
くれなるの大和錦もいろくの糸まじへてぞ綾は織りける  
誰が身にもありとは知らでまどふゆり神のかたみの日本だましひ  
くれ竹のうきふしまげき世の中にこの君と思ふ人なかりけり  
國臣といふ人、おもしき仰言かゝりて都に上る時、別るとて來たりし時、庵の戸さして出でて

あらざりければ、「松風のたゆるばかりはあらねども惜しは音の遠さかるらむ」と板のきりはしに書いつけて、簀子に置きたりしかば、あくる日かなたに行き見るに、はた留守なりしかば残しける。

まつ風のためゆるばかりはあらずとも音のみきよて遠さかる憂さ

日ならず旅立つとて、方たがへにわが庵に来て、「海山にひそみ龍も時を得て今は雲井をかけたこそ行け」といへる、はい叶ひて行く旅ながら、別れも事もさすがに惜しくて、

嬉しさと別れ惜しさといかなれば一つ心に思ひわくらむ

國臣の答へたる「嬉しさと別れ惜しきはわかつとも思ふ心をいかで隔てむ」

また「數ならぬ身は山風となりてだに御光かくす雲を拂はむ」といへるに、

一すぢの心つくしの秋風にかでむかはむ夕立の雲

境方に出立つ時に

惜からの命長かれさくら花雲井に、咲かむ春を見るべく

異國の船の寄せ來たる夢を見て、

櫻花見えも來ずして春の夜の夢にもかゝる異國の船

都のかた、いとかしこき事どもささげける頃、

浦安のうら安からの御代ながらこや治まらむはじめなるらむ

去年の秋より、山口にかくれおはしまし、やことなき御五かたを、この筑紫に迎へさせ給ひな

むとて、まつ赤間の驛までいらせ給へるよしを聞き奉りし時、

西の海に傾く春の月影や東にめぐるはじめなるらむ

やがて大宰府の大島居に、いれ奉らしめ給ひければ、その頃、

大野なる三笠の山の緋櫻もこそめに咲かむ春はこの春

大島居の信言の君して、やことなき御前より召させ給ひしかば、御うらへの方よりのぼらむと

したりしに、月さしていれざりければ、信言の君、まひて物せらるれども、とかく事むつかし

くいひて、いれざりける時、雨いたくふりてかたみにぬれたりければ、

くらきよの雨にまさりてふるものはせきにせかるゝ涙なりけり

御前に召されて、有がたき仰言蒙りけるは、嬉しとも嬉しく、かしこくもかしこく、且つは悲

しからずや。

なか／＼に亂れし御代の悪にて雲井の露にぬるゝ袖かな

谷梅といふ人、世をはかりてありけるに

冬深き雪のうちなる梅の花うもれながらも香やは隠るゝ

あゝる時

中々にたゞしき人ぞ夏蟲の火に入るうき目見る世なりける

野村望東尼

よひく、に曉告ぐる鳥はなけど暗き夜あくといふ人のなき  
ものゝのやまと心をより合せすゑ一すぢの大繩にせよ

谷梅のしの故郷に歸り給ひけるに、形見としてよもすがら旅衣を縫ひて贈りける。  
真心をつくしの衣は、國の爲、たちかへるべき衣手にせよ

谷の梅といふ人國の仇をたひらげたりと聞きて

谷深みふし、みし梅の咲きいつる風のたよりもかぐはしきかな

月照といふ人の隣に下るに

旅衣夜さむむないとへ國のため、草の枕の露をばらひて

とらはれぬける頃、同じ志の人々のむなしくうせにし供養に、血しほもて般若心經を書きける  
奥に、

おくれ居てかくもかひなし法のふみよみがへりこむつてならなくに

江戸なる大橋正順といふ人の妻卷子の、かきまろしつる夢路の日記でふみみを讀みて、その節  
義の心に感じけるまゝに、書もてそが家の事ども何くれと問ひやりの。さて彼の日記の後に書  
き添へける、

玉といふ玉は碎けて世の中にさらぬ瓦のかゞやくはなぞ

### 上京日記抄

瀬月の海を行くに、山々島々かなたこなたと見えかはるも、面白く覺えて、  
人げなく思ひし島のめぐりきて畑も出できぬ家も見えこむ

追風になりぬとて、舟人勇めるも心地よし。

追風にくだりくる舟うらやみて行く間に變るわがまともがな

日くれぬるに、船のうちいと心細し。

時雨ふる軒の響の音に似て舟の底うつさゞ波の聲

安治川より中の島まで、水棹をさして行く。やがて夕暮がたにぞ舟はてにける。

なには江をまづみをつくし、漕ぎつくし心づくしの船はてにけり

言道翁のもとを去りて京にのぼるとて、

いこま山あとに漕ぎ行く淀舟ののぼりたゆたふわが心かな

### 姫島日記抄

一 ゆめかぞへ

大御國危ふげにましくけるを憂へ悲しびまつりて、命を先だて、親はらから妻子などもばふ



らかし、たい御代の御橋にもと、世にさまよひありくも少なからずなん有けるを、さる者は中々にあぢきなき憂き目に逢へるけしきになりたるに、早くより世をそむき顔に片山蔭に隠るひ住める人なむ有ける。いつしか人知りけむ、世を悲しぶど訪ひ馴れて、憂き事はるけ處にやしたりけむ。その頃、いよ、恐ろしげなる御代とうつり行くに、かの山人、若き頃より天満つ御神をのみ尊みまつりて、詣で馴れたるが、六月二十日餘りの夜の夢に、盛過ぎたる梅の花、木立のかげに、匂ひ残れるを、一枝折りつるに、皆散り失せて空しき枝のみもたりと見て、夢は覺めたりけり。いみじう訝かしみて、いでや詣でまつらむなど思ふほど、彼の志深きますらなどもと斯共に、いたき罪を蒙るべきよしありげに、司のもとよりあるじなど呼び出づとて、こ

となくしかりける時よめりしとか。  
 浮雲の、かゝるもふしやしの、ふの、大和心の、數に、入り、な、ば、

まけし魂やいたかりけむ、この歌をはじめにてよめる歌どもかいたれば、めでたげなることなし。まさしかりつる夢よりかゝいそめたればにや、夢かそへてふ文の名もおほせけむかし。

一と間におしこめられて、親類どもが寄り來守れば、いみじう暑けきに、庭にだにえ出です、軒端にはへる朝顔のみ眺めくらして、

物ふかく今は思はじ朝顔も淺き色こそめでたかりけれ  
 あるあしたに、

をれつる昨日忘れて朝顔の咲きあらたむる花の安けさ

夕立けしきはかり降りて止みぬ

あめがした人の心も甲斐なしと鳴くか悲しき日ぐらしの聲

あゝる時

世にありて甲斐ある人に代りなば今も惜まぬ老が命ぞ

天満つ御神の御祭の日、二十五首の歌を手向くとて、

眞直なる心言葉もなか／＼にいひひがめつ、いふ世なりけり

もののふの共争ひを和らげてえみしに見せよ大和魂

いつしか文月になりて、窓にはひかりたる朝顔の種子になれるを取りなどしつゝ、

朝顔の花よりささと思ふ身の來む年咲かむ種を取りつゝ、

曇りがちに、曇りさも過しがたげに誰もいふめり。

一度は野分の風のほらはすは清くはならじ秋の、大、空、

召し使ひたる男わらばが、ゆくりなく捕はれて、ひとやに物せらるつるこそ、いみじう哀れに

悲しくも、はためさましかりしか。

若竹の枝も弱きに葛かつらかゝるは何のうらみなるらむ

心やりに題などまうけて、

雲 中 月

かたぐにわだかまりたる雲の間をかたよりいせで過ぐる月かな  
みだれいと

一筋にすぐなる糸は亂れてもとく道えなばとけすやはあらぬ

暁のきりくすの聲も、時めきて哀深し。宰府の御いつかた如何に聞かせ給ふらむ。わが家に在りてだに、うき事のかゝれる身となりては、例ならぬ心地するを、具し奉りてみ力ともなるべき物のふどものかぎり、かく取籠められしかば、み心細く、御行末危くや思し渡らせ給ふらむなど思ひ續けて、いも安からず。

秋毎に珍らしかりしきりくす悲しきものと今背ふるかな

うまこなるものさへ、同じぬれぎぬにつままれて、家のかたくに埋もれたりつるに、同じ家に二人あらむ事さへかなはずなりて、親の住みにし故郷にうつしやらるゝを、二人のうまこは更なり、女ども皆悲しび、わびごとどもすれどもかなはず。終に居待の月と諸共に家をいつる時、ゆゑある扇のありけるにかいつけて、柱にかけて別れつ。

かへらでも正しき道の末なれば誰も歎くなわれも歎かじ

など心つよげに物したれど、乗物に乗るより泪せきあへず、つひの門出にやと思ふにうつしげもなし。

のり物の思ひもかけぬをすこしに居待の月を見るが悲しさ

何事のついでにありけむ

久方の雲井の蝸の一聲を心づくしにまてる頃かな

蟲のねはよるく枯れまきり、草木の色は朝毎にうつり行くも、天のなしのまゝなりと見ればめでたからずや。

千萬のもの司といふ人ぞなか、天に地にそむける

庵の紅葉を折りて、かしの宿守がもてこし心根こそ、哀れにをかしかりしか。

住はてむ庵と思ひて花紅葉こしら植ゑにし昔はかなし

もる人々のいざなさも羨ましくて、

中々にわれもる人は夢の世のはかなさ知らで寐たる安けさ

事のよしとさせ給ふとて、おほやけより乗物のむかへに來たるに物して、まばく出でたつ。幾度かかくて行きかふ道ならむつひのむかへといふにしもあらで

御國の御櫓にもなるべき男の子どもは許させ給ひて、ある甲斐もなき老の身一つにふるつ頁はせ給はらば、老の思ひ出になど申して歸り來て、

いのふの取荷の罪を身一つに負ひて軽くもなる命かな

寅の刻ばかりに目さめて

世の中はなるにまかせて曉の鐘をも待たじやみのよながら

終には神のみ國昔に立かへらせ給ふ時ましまさめど、暮れかゝる日は、先づ入りてこそ出づ  
るあしたもあれ。末短かき老らくの、明日を待得べくもあらねば、世にありて甲斐あらむ人々  
に代りてもなど常に思ひつゝ、

長らへて見る甲斐もなき世の中の暮れ果てぬまに亡き身ともがな

神佛を拜み奉るとて

我爲を祈るに、あらず神佛御代の御爲の人の爲なり

九日、今日は菊の節會なり。

わがよとはつゆ思はねど、菊の花九重に咲く、大御代もがな

遠く物の響く音すれば、何ならむと耳そばだてし聞くまゝに、おどろくしう響きぬれば、異  
國船、あしやなどに寄せきて、石火矢もや打つらむと思ひたりしに、近づくまゝによく聞けば、  
かみなりの轟くなりけり。

時ならで轟く夜半のなるかみはみ世のあた人神やうつらむ

あゝる時

すべもなく物のわびしきその中にまた面白き事もありけり  
心すぐに思ふさへにもならぬ世はならでなり行く物にやあるらむ

老

ともすればわが身の老も忘られて末長げなること思ふかな

いかで世にありて君がみ爲にもなるべきもののふたちに代りてもうせまほしとて、後の世の事  
ども物するついでに、

わが君の千歳のみ名の清からは、碎けむたまはつゆも惜まじ

家人にいひ遣はしける

一度は限と出でし家人のまた戀しくもなりまさるかな

何事のついでにか

忘れては世の行末を思ふかな、長らふべくもあらぬわが身を

憂き月日もいつしか過ぎつらむ、早霜月になむなりぬる。山もりがもてこし梅が枝のふみた  
りしが、今朝開きそめたり。

きらられてもほゝ笑む瓶の梅の花さてこそ人もあらまほしけれ

二 ながれ木

とりの時はかり、乗物とのへてむかへに來たれば、ためらふべくもあらず、出で行くまでの  
事、かくもうるさし。くさかべの堤づたひを行くに、十四夜の月簾の間よりきら／＼とさし入  
りたれば、

霜あらし月にたぐひて流れ行くみをさすばかりさゆる夜半かな  
きしの浦のあるじしたる者、歌をこひければ、

舟出する岸の浦波たち返りまた此の家に宿るよもがな

漕ぎ離るまゝにかへり見のみこそせらるれ。

陸よりもわが乗る船の人かげを誰か彼れかといひつゝ見む

今日はなき間といへども、冬の海のくせにや、浪いと高く、ゆられ行くに、姫島近づくまゝに、  
汐浅く岩まげうやあらむ、波のうれしく舟をつみ、わるばかりに高ければ、皆心地あしげに  
ぞなれる。立石崎のはなを出づるより、おどろくしきまで浮き沈めば、いみじう心地あしげ  
に成て臥したる間に、舟はやはてぬといふ。警固の侍にいざなはれて、長が家に暫しいこひつ  
し、司の前に出づ。畏き仰言ども承りて、囚の方にいざなはれ行く間、島人こしかしこにつどひ  
渡りて見るもはしたなし。さて彼所に行き見るに、海づら遠く見渡して、をかしげなる所に、  
ふさはしからぬ瓦家のあらしくしき松の木、荒格子こそにくげなれ。なにがしといふもの一人  
ぞ、こゝまで具しつるが、警固の者と共に往なむとて、囚の前にふして泣くこそいみじかりつ  
れ。やがて暮れ行けば、月をはたくと立てこめたるに、まだきくら暗となんなりぬる。夜に  
入るまゝに風吹きまきりて、山も崩るはかりの音すれば、  
住みそむるひとやの枕うちつけにさけぶばかりの波の音かな

こゝの事どもとりまかなへる人、煙草の火を忍びておこせたればいと嬉しく、その光して心あ  
てに物ども書いつくる間に、はた、こゝの人の、いとく忍びて蠟燭をおこせたりしが、いみじ  
う嬉しくながみしつべし。

暗き夜のひとやに得たるともし火はまこと佛の光なりけり

鏡山、峰平らかに南にみゆ。

朝なくむかふもやさし鏡山あらぬ姿に身はやつれきて

いみじうわびしかりける夜、

さゆる夜は猶や思はむかたるらむ故郷人のわれやいかにと

あゝる夜

ひとやだに逃れ出でなばなかしとも見つゝ過さむまの月影

夜もすがら岩うつ涙の音のみぞすまじき。

よる波の岩に砕くる音きけばむせばぬものもなき世なりけり

故郷より文おこせたる夢をみて、

古里のたより嬉しき文の末みはてぬうちにさめし夢かな

鶴の鳴くをやなら待ちえて、

いらきよはなほくらけれど庭鳥の鳴けば心ぞ先づあけにける

いみじう寒きあした、海士の女がいささかの火をきて来て、外より袖ども暖ためさすれば、ふしもながみつべし。

暖むる袖より胸そこがれぬるあまが心の深きおき火に

夕ぐれ方、近き家の女どもが訪ひ来て、外にゐたるが、鯨の汐ふきて行くを、數多船の追ひ行くと知らせたるに、やなら慰をあけて見るまに、鳥かげになりぬるぞ口惜しき。小川といふところの鯨なるよし。

小川にも鯨すむこそ樂しけれ人もいづくに誰かすむらむ

海面のどかに小舟ども行きかふ。

風きぬとて沖こぐあまの釣舟もわれも命の小春なりけり

穀のあらしくしう降りきたれば、

さ夜寝ふる里人も夜もすがらこなたや思ふ思ひこそやれ

家人の戀しさ遣る方なければ、つと起きて坐をくみたれど、

もとよりも色も香もなき身ながらもさすが石にも木にもなられず

夜ふくれば風いたくぞなる。

あはれく風にもむせぶひめ島の浪に袖ほす時もあらなくに

二十五日、題をまうけて二十五詠のうち、鬼やらひ

おのづから心に住むはやらひても世をたちならす鬼はさけあへず

今迄は軒の庇がくれにのみ過ぎし月の、有明方になりてはじめてさし入りたれば、

燈火のあるにほこりて家にてはうとくも過ぎし冬の夜の月

年はつる日

流れこしうき身忘れて迎へてむいつこいみ代の春ぞと思へば

### 三 うぐひす

あくればひのえ寅の年

家人のむかふるさましほのぐと心に匂ふ年の明け方

四の前なる石垣のあはひより、葦の花の咲きたるを見いでて、

人やりはすくなき物をおのれからこゝにすみれの花咲きにけり

二日の明け方こそなかしかりけれ。かくてあらすば、かやうの海づらいかで見むかし。

いとこの島つしまなかけて新羅まで引あまりたる横霞かな

盛に咲ける櫻の夢を見て

時わかぬひとやも夢は春ならむまだき櫻の盛見えつる

鶯は鳴くにやと聞ひたれば、いかなる聲にて、いかなる鳥にかなど聞知らぬさまなり。かかる

離島には、住まずやと、いとあぢきなく思ひたりつるに、いと近う聞えたるこそいみじう嬉し

聲、を、知、る、人、も、な、ぎ、さ、の、鶯、よ、わ、が、待、ち、得、つ、い、聞、く、と、知、れ、か、し、  
けれ。

過ぎし日の鶯その日のみにて来ざりしかば

中々にきゝ初めぬ間は鶯も住まぬ島かと空に待ちしを

ふぢといふ女が、いみじう寒き夜に、窓のもとにたちて、夜更くるまで何くれと物語りて慰め  
ぬるが嬉しう哀れに覺えて、

寒くやと訪ひ来し人を沙風に吹かせて園にいれぬわりなさ

有明の月さしいりたり

松柱、こゝしきひまなもり来て、も影、やはらげる春の夜の月

過ぎし頃、聲たえつとて悲しう思ひたりつる鶯の、此頃はたゞ同じ處に来てなくが、いみじう  
哀れに嬉しかりつるを、誰人が銃にてうちたりとて、童がもて行くを見るに、胸もつぶれて、

鶯をまことうちしやなさけなやあな人げなやさも心なや

と目さへおしめぐはれて

友は皆離れ小島にかつ馴るゝ鶯にさへ別れつるかな

囚の柱に書いつくとて

又こゝにすみなむ人よ堪へがたく憂しと思ふははつかばかりぞ

はた鶯の聲のきこゆれば嬉しくて

うたれぬと聞きて歎きし鶯の千かおとゝひかあはれそこに鳴く

鶯のよくなつきたれば

軒近き枝わたりして鶯のうきすみかとしていとひげもなし

よむ文のその名となふる鶯にわが聲やめてゆづりけるかな

あまの女どもが、梅の咲きそむるより度々折りもてくるに、桃のめでたきをおこせられたれば、

汝が心かけて折こし桃の枝は千枝八千枝にもまさる嬉しさ

など書いちらしてとらせつれば、嬉しがりて、絶えずおこするこそをかしけれ。かくと聞きて  
かたぐより少女どもが折りもて来るに、竹の筒を幾つも人に切らせてさしたれば、花にうも

れたる心地したるに、鶯の打しきりて鳴くがいみじう哀れに珍らしくて、

花の枝鶯の音の絶間なみ春には富むと思ひなさばや

雨ふりくらすに、鶯はかれず来てなくが、いみじううたかくあはれ限なし。

言にいへば淺げにぞなる鶯の聲きくたびに思ふ心を

### 防州日記抄

山口なる湯田の田植を見て

よにあまるちりのこの身の命にもかゝるめぐみのさ苗とぞ見る

野村望東尼

人々酒などものする時

おもしろく見つゝゑひぬる酒さへもさなへとる子が袖のしづくぞ

まことに田のもの屋に物して、思ひもかけぬ早苗のさまを見るさへ夢の心地になむ。去年の此頃ばうき島の牢舎にて、田も見られず、ただ思ひやりたりしな。

嬉しきもかなしき時も夢なればさむる時しもあらじとぞ思ふ

小田村大人に(小田村孝太郎)

いつしかとわが待ちわびしたづむらの壁を雲井にあぐる時來ぬ

山田大人(山田市之丞)いくさづかさをして出立ち給ふな

御代のためいくさひきゆく物部に老が心もたぐへてぞやる

宮市なる山内某の家にて、かれこれ歌よみけるに、木枯を、

長閑なる小春とてこそいでにしか歸るささぶく木枯のふく

きぬなどのやぶれたるに

きりぐす鳴きあかせども旅ごるもつつりいあへわが夜寒かな

吉田太郎長崎にて死去のよしきよて

さだめなき人の命と知りながらあたらしをのこをまた先だてつ

霜月朔日病あつしくなりける時

よひくにあかつきを待つ朽ちしげの思ひの外にきえぬしら露

## 家集のいろく

家集に就いて、殊に徳川時代の歌人の家集の體裁、書式、書名などについて御話しようと思ふ。一には當時の歌人の心構へを知る上に、一には當時の出版物の様子を知る上にも、多少の興味があると思ふからである。それに先立つて家集の起原、價值等について、些か考へた事を御話しよう。

家の集の最も古いものには、萬葉集に引用せる人麿集、金村集、蟲麿集、福麿集等がある。併し是等は今傳はらず、かつ人麿集といふも、自らの歌のみならず人々のをも集め載せたるものと思はれる。現存せる家の集の古いのは、萬葉集中の卷五と、卷十七以下二十迄の五冊である。元來萬葉集は、未定稿のまゝ傳はつたもので、全篇に渡つて十分整正せられたものではない。その卷五の如きは、全く憶良の家の集である。自分の考では、憶良の集は數卷あつて（憶良は中年で入唐した折にも歌を詠んだ）其

最後の一卷、即ち晩年の作の一卷が、家持の手許にあつて、それが萬葉の一部分に編入せられて残つたのであらうと思ふ。また卷十七以下は、家持の家の集で、自分の考では、是も天平寶字三年以後が猶數卷あつたであらうに、大伴氏の亡びると共にそれも早く亡びうせて傳はらぬのであらう。何故といふに、家持は若い時から歌數を最も多く詠んで、ある時は殆ど毎日歌を詠んでゐたのに、中年以後、大伴氏の勢力を回復するに盡瘁して事繁かつたとはいへ、その延暦四年に世を去るまで、廿餘年間に一首も詠まぬ譯はない。必ず續萬葉集ともいふべきものがあつたであらうに、それが失なはれたのであらう。萬葉集の卷數廿卷といふ事も、猶考ふべきふしがある。それは兎に角、この卷五及卷十七以下の五冊は上代の家集の體裁をほゞ傳へてゐる。

次に歌仙家集、一名三十六人集がある。これは大納言公任が撰んだ三十六歌仙の人人の家の集をあつめたので、誰が何時輯めたかといふ事は分らぬが、時代は餘程古い。千載集雜部に、大納言實家のもとに卅六人集を借りて返し遣はす云々の贈答があり、

本願寺所藏の古寫本は、宇治關白時代のものならむとの事である。此歌仙家集の外に諸歌人の家の集は正續の群書類從に多く收められてゐる。村田春海はこれらの家集を分類して四となし、第一は、赤人集家持集の如く、後人の僞撰にかゝるもの。第二は、業平集友則集の如く、其人の作を後人の輯めしもの。第三は、西宮高明公集齋宮女御集御堂關白集の如く、時の人のあつめしにて、詞書に、よませ給ふなどあるもの（貫之集躬恒集の如きも第三に屬す、そは題しらすといへる歌あれば）第四は、伊勢集中務集順集能宣集の如く自らあつめしものであると云うて居る。

次に家集といふもの、價値について語らう。元來歌を集めたものは、之を大別すれば、選集と家集とである。前者には勅選と私選と、後者には自選と友人門弟若しくは後人等の選んだものとある。（前述の春海の分類もあるが、ここにはかう分ける）まづ選集家集について考ふるに、いづれも各自の特色がある。選集はその時代の歌風を大觀する上に於いては家集にまさつてゐる。が、選者の標準によつて取捨選擇せらるゝ爲



に、どうも一定の型に入つたような歌が選ばれて、従つて個々の歌人の眞の面目はおははれがちの嫌がある。殊に勅選に於いては、朝廷の事業であるから、たとへば禮服姿の歌のみ選ばれて、却つて眞の面目を傳へた平常着ふだんぎのものは採られない嫌がある。それ故に歌の集としての價值からいふと、選集よりも家集の方が勝つてゐると言へる。然してその家集のうちではどうかといふに、他人の選んだのよりは、自分で選んだものが勝つてゐる。素より自分で自分のものを選ぶのは困難なことであるから、却つてその選が當を得ないやうな事もないではない。が、併しよく心をつけて精選したものであれば、どうしても他人が選んだものよりもその歌人の面目を一層よく傳へてゐる。それ故に實際歌の集の中で吾人が讀んで最も興味を感じるは、家集、ことに作者その人によりて選ばれた家集である。(井上文雄も家集の興味の深いよしを伊勢の家づとに論じてゐる)

然るに、此自ら家集を選んで世に公にするといふ事に就いて、昔はかれこれ言ふ風があつた。彼の千蔭がうけらが花に自序を添へて出版した時に、ある人がそれを批難したので、千蔭の友なる春海が辨護して、家集辨といふ論をかいた(享和三年)事の如きはその一例である。中には實際自分で撰びながら、わざと門人に撰ばせたやうにして公にしたたぐひもある。是等の風は何に原因してゐるかといふに、世間に公にせず人に知らせずにおくといふ事を、何となく自ら高しとやうに考へた一種の隱逸風の考からも來てゐたが、又實に自分自身に歌人であるといふ事について、充分の自覺と自信とを持つてゐなかつたことにも原因してゐる。元來詩歌を玩弄物と思つて、その尊重すべき藝術なる事を知らず、その道に對して是を一の閑事業であるとかやうに考へてゐたのは、社會一般の思想であつたが、これは實にまた歌人自らの心にも存してゐた。自ら歌人たる事を天職と信じ、歌をよむ事を以て人間の立派なる事業と自覺してゐた如き人は少なかつた。或は之を消閑の具、もしくは單にわが心やりのすさびのみ思ひ、或は之を古學の方便と考へてゐた從來の歌人中、この點に於いて卓絶してゐ

たのは香川景樹である。彼は歌人たる事を以て大なる天職となし、人間の立派な事業として、その困難なる生涯のうちにも大なる慰を求めて、その天分をつくした。景樹の歌、その歌論については別に意見もあるが、この點に於いては景樹を偉いと思ふ。自分も此考を以て自分の天職を盡さむ事を心がけてゐる。自分がかつて大隈言道についてある人に語つた時に、其人が、言道は歌をよむ事だけで、其外には何もしなかつた人かと問うた事があつた。言道は、實に歌人としてそれだけで偉いのである。言道は歌人といふ尊とい天職に生涯を献げたのである。さて凡そ歌人にとつて、最も大切なもの、その生命とも言ひつべきものは何であるかといへば、言ふまでもなく其作り出した歌である。それをあつめた家集である。位にあらず、富にあらず、世のいはゆる名譽にあらず、歌人を永久に傳ふるものはその家集である。家集は其人が歌人としての價値を赤裸々に後世の批評家に示すもので、歌人の眞價は其家集によりて後世に至つて定められる。其當時多少名のあつた人で、其家集を讀んで見ると、氣の毒なほど

良い歌のない人がある。中には一冊の家集すらえ残さぬもある。それに反して少しも世に名の知られず埋もれてゐた歌人で、其家集によつて歌の歴史の上に光を放つものがある。例へば言道の如き、柳原安子、野村望東尼の如きは其たぐひである。さらば歌人たるもの、此大切な家集を残すに於いて、決して憚るべきではなく、否大に進んで自ら精選して立派なものを残さねばならぬ。これこそ實に歌人の義務である。

さて己が生命ともいふべき此家集を著すに於いて、歌の精選はいふ迄もないが、その體裁や、その表題等についても、作者自らに於いていろいろに心を碎き工夫をこらすのは、實に自然の事であらう。而して又そのいろいろの心がまへの上にも、自ら其作者の歌風や人物などが窺はれて、いかにも面白いものがある。今日は徳川時代の家集（多數は刊本、少數の寫本もまじへて）について、自選にかゝるものは素より、他人の選んだものをもふくめて、少し調べた事をお話しようと思ふ。

まづ體裁及び種類について述べよう。

表紙で變つてゐるのは、高島式部の麥の舎集には、麥の畫が描いてある。蜂須賀齊裕のうづがもとには、領地に近い鳴門の渦の輪の中に、その愛した梅の花を模様にして入れた紋様が浮き出しに成つてをる。

序文は、自序、又は先輩友人門人などの序のあるもの、又一つもないものもある。多くは形式に流れた序文であるが、神山魚貫の苔清水の自序は、彼が歌人となるに至つた來歴苦心を記して、一種の立志傳とも見るべく、眞情人を動かすものがある。

現今の詩歌集のやうに、卷の始に誰々に献すと云ふ事は昔は無かつたが、今いうた苔清水の自序には、亡父の靈に手向く云々の句がある。また、筑後の僧寂峯法師の樹下石上和歌集は、かつて石州の藩侯が書き集むるやうにとの仰があつたに、其翌年の秋世を去られた。伯牙が絶絃のおもひに其まゝにしておいたが、世つぎの君の命で『七回御忌の御追福の御爲、尊靈のみまへにさづけ侍りける』と自序に書いてある。(因に云、此書は寶曆十二年に選んだので、十七卷、歌數二萬一千七百餘首ある。日本諸國を

行脚して、其こゝかしこで詠んだ歌が多い。)

又現今の詩歌集のやうに、裝飾として、歌に關せぬ畫の入つたものは昔は無かつたが、歌の意を描いた繪の入つてをる家集はある。かの洛陽祇園に茶店を營んで、風雅の嗜みの深かつた梶女の家集梶の葉には、彼の友禪模様をゑがき始めた宮崎友禪が畫をかいてゐる。其畫は、一頁の上半に歌一首をかき、下半にその歌の意を畫いてあるので、殊に趣が深い。又その養女なる百合女の家集さゆり葉には、同じやうに川島叙清の畫が入つてゐる。又はじめに作者の肖像を載せたものには、井手階覽の志濃夫廼舎歌集。長松庵師準の松の夕月がある。又はじめに、作者の住居のさまを畫がいたものは、かの梶の葉には、その祇園社頭なる茶店のさまが畫いてある。蓮月尼のあまのかる藻。又松の夕月にも出て居る。紀の川のほとりに菴をえめて、悠々自適琴を弾じ詩歌を楽しんだ僧幽眞(また古岳といふ)の空谷傳聲集には、その古岳菴琴堂之圖が挿入してある。

形の最も大いなるは、龍公美のならの葉で、奉書一頁に一首づつ大きく書いてある。小さいのは松平定信の自書を彫つた三草集、似雲法師の歌を抜萃類題せる似雲和歌集等で、共に袖珍本で細字に書いてある。

書式で變つてゐるものには、深草の元政の草山和歌集は、桂宮萬葉の體裁に、題を一行歌を二行にかいてある。鹿持雅澄の山齋集は萬葉註釋家の泰斗だけあつて、萬葉風に眞字のみで書いてある。又僧良寛歌集は、彼の秋萩帖の體にならつて、草假字のみで書いてある。また前にいうたならの葉は著者の筆跡を模刻して、法帖風に出來てゐる。

分類法はいづれも古今集の體裁にならひ、短歌を四季戀雜と類題してある。終に長歌旋頭歌今様文章の添うてゐるものもある。村田春海の琴後集。上田秋成のついでに冊子などは歌文相半してゐる。海野遊翁の柳園家集は旋頭歌、師岡正胤のまのぶ草には今様歌が多い。

畫家中林竹洞は、歌にも巧みで、その家集清白集は、はじめに長歌を載せ、次に短歌と詩とをいれませにかいてある。

櫻溪海量法師が日本全國を跋涉した折の歌をあつめたびとまばなは、畿内山城に始まり、西海道薩摩に終つて、國わけにしてある。畫も入つてゐる。

類題にせず、詠んだ年代にしてあると、作者の歌風の變遷を知るに都合がよい。そういふのは似雲の年並草で、享保年中より年次によんだ順序に次第してある。(似雲は名山靈地こゝかしこに遊んで、住所を定めぬ故、世に今西行といへるを聞いて、西行に姿ばかりは似たれども心は雪と墨染の袖と戯れ詠んだ面白僧)。曙覽の志濃夫廼舍歌集、加納諸平の柿園詠草、大隈言道の草徑集等も、その年月は記してないが、詠んだ順である。

近來出版される歌集には題の書いてないのが多いが、僧良寛歌集は題が少ない。(此集は村山半牧が良寛の作を輯めて世に出したのであるが、良寛の短冊をみると、題の

なきのみならず、其書式も人と變つて、上の方からかき下してある。

詞書の長いことや、贈答の作の多いのには、小澤芦庵の六帖詠草がある。芦庵は、たゞ言うたを唱へ、其歌論の書には、ふるの中道、ふり分髪、六義論など、卓識に富んでゐるが、歌のよみ口は、それに伴はなかつた。詞書は作者の境遇を知るには都合がよいが、詞書を長くしてそれで歌の意を補うた歌や、即興の贈答の作などには、傑作は殆どないというてよい。また六帖詠草には、かの順集にあるのにならつた雙六の圖の歌や、圓形の阿彌陀佛の折句の歌など、變つた（むしろ遊戯的の）書式がある。

其他伊達千廣の隨緣集は、師なる本居大平、及び友人の批評を歌の次々に掲げ、それに對して自家の意見をも併せ載せて、卷のはじめに、『藤垣内翁をはじめ人々の褒貶を記したるものは、一つには人の芳意を失はむ事を恐れ、一つには自歌の面目を存せむとす。其展檢評論に至りて愚意あるものは、又覆藏せず。大に好心を破るに似たれど、諾なはずして阿容せんも清々しからぬわざなりとて試に記する也。』と記してゐる。

千家曾孫の自點眞璞集は、自らよしと思ふ歌に、の點が附けてある。

宮部義正と、妻の萬女は、夫妻共に歌を詠んで、夫妻の歌をあつめて相生の言葉を著した。又其子なる義直も歌の嗜深く、親子三人のを輯めて三藻類聚を出した。

中島廣足は、歌人といふよりは、語格學者であるが、はじめ樞園歌集を出し、更に玄のすだれを一集三集と順次刊行して六集まで出した。

京都の河本延之も、毎年わが作を百首づつ一卷に出版して、嘉永六年より安政五年まで、可々樓年々百首を六卷刊行した。

刊本の中で歌數の多いのは、契沖阿閑梨の漫吟集であらう。廿卷四冊、歌數七千首に近い。

次に表題に就いて述べよう。

一般の例の中で、殊に多いのは舍の號を其儘用ゐるのである。本居宣長の鈴屋集。

獅子巖庵と號してゐた湧蓮法師の獅子巖和歌集。江戸不忍の池の畔に住んで泊泊舎と號した清水濱臣の泊泊舎集。閑田廬と號した伴蒿蹊の閑田詠草。伊豆の女歌人菊池袖子の菊園集の類など、無數にある。

舎の號に因んでつけたのは、桂園香川景樹の桂園一枝。藤舎齋藤真蔭の藤かづら。松屋高田與清の松屋棟梁集の類がある。

號をさながらつけたものは、小林元雄（號歌城）の歌城歌集。高橋正澄（號殘夢）の殘の夢。村田春海（號琴後翁）の琴後集。徳川光圀（號常山人）の常山詠草。桑門にして古風の歌を詠んだ櫻男法師の言靈彙集の類がある。

姓名に因んだものには、竹村尙規の竹の五百枝。木島菅磨の木積集。梶女の梶の葉。百合女のさゆり葉。知月尼の桂の露。縣門の才女で、若くて世を去つた弓屋倭文字（倭文は古代の織物）のあやぬの。「あかぬかな月すむ夜半に」の歌を叙感ありて、桂子の名を給はつた横山桂子の桂の花の類がある。

古への貫之集、順集などに倣つて、我が名をさながら附けたのは安藤野雁の野雁集がある。（野雁は變つた行の多い、大伴旅人卿以上に酒を愛した奇人で、まかも萬葉を愛讀し、その註釋萬葉集新考をも著した人であるが、萬葉流に野をぬと訓み、且つ吾はぬかつた男であるからとて、常にぬかりと訓んでゐた）

後人のあつめた集で、其名又は號等をさながらつけたのは、賀茂翁家集。惺窩先生和歌集。古學先生和歌集。執齋三輪先生遺稿。（此三人は漢學者で歌に秀でた人）橘守部家集。一柳千古家集。大暎道人草稿の類である。

地名又は土地に因んだものには、東の江戸に在りし加藤枝直の東歌。同じく江戸の畠山常操の武藏野古草。上總なる江澤講述のなるかの海底石。下總香取の神官伊能顯則の夏ごも。（香取の枕詞）前にもいうたが蜂須賀齊裕の鳴門の渦に因んだうづがもと。福岡の市外向が陵に住んで居た野村望東尼の向陵集。日下部高豊の山のさち等がある。事物の名に因んだものには、鳥に關しては後水尾天皇の鷗巢集、貝では村山松根の忘

れ貝。熊谷直好の浦の沙貝。植物では鳥丸光廣の黄葉和歌集。下河邊長流の晩花和歌集。田中大秀の桂葉集。猿渡容盛の樅の下枝。原久胤の五十槻搔葉集。行誠上人の落葉集。加藤千蔭のうけらが花（武藏野のうけらが花といへる古歌によつて附けた名）本居大平の稻葉集。八田知紀のまのぶ草。畠山梅軒のさき草。宮部義正の野邊のかつら高野東根の一むらすき。林竹浪の浦の藻草。芳宜園門下の女歌人中村ふみ子の蓮の露の類。器物では、中島廣足のまのすだれ。滋野貞融の不繫舟（つながぬふね）の類がある。

特別の例で、作者の意を寓したるものには、田安宗武の天降言（あもりごと）は、作者の人格も思はれて殊に奮つた名である。神山魚貫の苦清水は、作者のやさしい面影がうかぶ。水野忠邦の常侍集は、水野越前守の面目が忍ばれる。また伴林光平が、代々の御陵の荒廢せるを歎き、こゝかしこの御陵墓を訪うた折の歌集なる野山のなげき。紀氏の六帖の歌の體を常に心にかけて、卷の數をも六帖にした小澤蘆庵の六帖詠草。漁夫

の詞のやうに分き難き歌と謙遜した足代弘訓の海士のさへづり。田舎人なればとこれも謙遜した越後人泉圓のひなさへづり。さては蓮の臺を願うた釋大我の蓮葉和歌集の類がある。

境遇に因んでつけたものには、安藤野雁が旅中の作を集めた旅路の草の葉。桂園の門人なる渡忠秋の桂かげ。蓮月尼のあまのかる藻。杉で名高い稻荷山の神官荷田東満の姪で、其養女になつた蒼生子の杉のまづ枝。前にいうた寂峯法師の、雲水の遍歴に詠んだ歌が多いといふので名づけた樹下石上和歌集。客が來ると今まで書きかけてゐた草稿を、すべて坐右の柳行李に入れたので、人々が、例の先生のつらこよというたのでつけた上田秋成の籐篋冊子（つららぶみ）。公けの咎めを蒙つて籠り居た廿日間に、日々詠める長歌短歌をかきつけた和田嚴足の甘田草の類がある。（嚴足又の名眞震は、熊本の藩士で、長瀬眞幸の門に學び、雄健なる古體の長短歌に秀すと、奇骨に富み、又異様の文字を書いた）

卷の初めの歌の句によつてつけたのには、鵜殿よの子の佐保川。吉田松蔭の涙松集。長松庵師準の松の夕月。竹内亨壽の初根芹。竹内直道の道芝の露、の類がある。

典故によつて附けたものは、荷田東滿の春葉集。(萬葉なる、春の葉の繁きが如くに因る)海量法師のひとよ花がある。(前にいうた如く旅の歌の集であるが、萬葉なる『この花の一葩ひつこの中に百種の言ぞこもれるおほろかにすな』といへるによつて、我が歌の中に日本全國の風景が籠つて居るといふ意でつけたもの)

和名に對して漢風に附けたものは、高橋正澄の塵室草露。井上文雄の調鶴集。前に言うた空谷傳聲集の類。

佛典の語により名附けたのには、彼の自得居士の隨緣集の類がある。

猶詳しく調べたらば、變つた名もあるかも知らぬが、宣長のむすびすてたる枕の草葉、魚彦の大船のかとりの魚彦雜集(二つ共に歌集ではあるが、家集でない)といふやうな奇抜な名は見當らぬ。つまり前にいうた如く、家集は歌人の眞面目の事業で、

後世に傳へようといふ趣意で選ぶのであるから、誰しも眞面目な名をと名づける故であらうと思ふ。



## 近世歌人雜話

近世の歌人に就いて、思ひついた事を話して見よう。

○眞淵の歌は、門人美樹の記せる如く、舊習を脱せぬ時代、萬葉模倣時代、及び萬葉古今折衷時代の三期に分れる。師の歌の第三期を學んだのが千蔭春海で、第二期を學んだのは宗武魚彦である。兩者のうちいづれかといへば、吾人は宗武魚彦をとる。千蔭春海はその歌美しくはあれど、新しい所がない。宗武魚彦はよく萬葉を學び得て、まかも模倣に止まらず、自己の特色を發揮して居る。

田安宗武の家集天降言は、その名からして彼の抱負と歌風とを現はしてゐる。宗武と實朝とは類似の點が少くない。共に將軍の子であること。共に萬葉を好み讀んだこと。實朝が萬葉自得以後、歌風の一變した如く、宗武に於いては眞淵招聘後その歌風が

一變してゐる。而して宗武が自己の特色を發揮したのは、實にこの眞淵に學びし後である。その歌風を代表する作二三をあげむか。

學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませ  
どそれ猶し學ぶ

天地のめぐみに生るゝ人なれば天の命のまに  
くをへや

むさし野を人は廣しとふ我はたゞ尾花わけすぐ  
る道とし思ひき

楯なべてとよみあひにし武士のこてさし原は今  
はさびしも

ふる雪にみ笠も召さず皇子たち御狩せすなりみ  
鷹つとめよ

ふる雪にきそひ狩する狩人の熊のむかばき眞白  
になりぬ

我宿のそがひにたてるかしの木にかし鳥來鳴く  
頃は早來ぬ

その雄渾の風、以て察すべきである。

宗武には又、國歌八論餘言、歌體約言等の歌論の著書がある。さすがに卓抜の見識が見える。彼とその歌風は異なれども、その子には彼の松平定信が出た。宗武が一家は國文學史上、没すべからざる功がある。

宗武の和歌は世に知られなかつた。予がかつて續歌學全書に採録せるのみである。なほあらばと思へど、田安家にも傳はつてをらぬとのこと、惜むべきである。

楫取魚彦は書をもよくした。眞淵の没後は彼に従つた人も少くなかつた。彼の歌ま

た雄勁にして蒼古、よく萬葉の趣を得てゐる。

皇神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やま  
づ霞むらむ  
さす竹の君がおましともろこしの虎とふ神の衣  
たてまつる

天の原吹すさみたる秋風に走る雲あればたゆた  
ふ雲あり  
五百つ鳥ふみ驚かし御狩人朝けの風に袖吹きか  
へす

九萬里このよろづさとに飛びかふ鳥すらも鷦鷯さきなすらむ天つみ  
空かも  
常世かも海の宮わたかもいと竹は田鶴のこゑかも龍

の聲かも（中津侯の母君の許に琴笛のすぐれ人つどひける夜）

六月の中の十日の中空にいともかしこき日のみ

面かも

他國にありとふ酒の泉もが思ふ友どち舟うかべ  
てむ

彼の全集もまた、惜しむべし傳はつて居らぬ。その歌の遺れるものは縣門遺稿に載れる安永五六兩年の草稿、續歌學全書に採録せる大船楫取魚彦雜集、香取四家集の一部分等に過ぎぬ。予が下總佐原なる伊能氏に魚彦の跡を訪うた時に、遺れるものをと尋ねたが、僅かに、明和元年霜月、眞淵、千蔭、浚明、美樹、春郷らが佐原に集まつて詠んだ歌卷のあるのみであつた。因に云ふ、伊能氏の一門は、魚彦をはじめ、伊能忠敬、伊能穎則、伊能節儉等を出した佐原の名家である。

○故子規子は、萬葉風の歌人として平賀元義を激賞したが、彼の家集を見るに、いかにも雄健にして、劍を歌つたものなど多く、又いたく漢風を嫌つてゐる。調子はよく引しまつて、四句で切つて又五句で切る格を好んで詠んだ。萬葉を模し得て、萬葉の壘を摩する歌もあるが、萬葉以外には出でてをらぬ。又餘りに平淡に過ぎてたゞことの嫌あるものが少くない。

高田のや加佐米の山のつむじ風ますらたけをが

笠吹き放つ

まな兒なす兒島の高嶺津島山かぎろひたちぬ夜

は明けむとす

いそのかみふりにし妹が家とへば秋の花のみ句

ひてありけり

梅の花窓にうつりておもしろき今宵の月夜君を

こそ思へ

大君の春さりくればあを菜つむわが山方に霞た  
なびく

雄神川あかとき寒み河上のゆついはむらに猿さ  
はに鳴く

みわたせば天の金山三野の山霧たちかをる雨ふ  
らむとす

月よみの光さやけみほことりて男さびする丈夫  
のとも(八月十五夜弄槍して)

船の上いでましの山の山おろしやしまの國を吹  
きとよもすも(詠史)

吾大君物な思ほし大君の御楯とならむわれなけ

なく(見島備後三郎大人賛)

これらは集中の勝れた作である。

○次に萬葉學者として有名な鹿持雅澄の歌に就いて述べよう。同じ萬葉學者たる契沖の歌は、むしろ古今以後の風で、詠歌の上に萬葉の影響はうけなかつたが、雅澄は之に反して、その歌全然萬葉風である。先に續歌學全書を編した折、彼の長歌集は載せたが、短歌集は見るを得なかつた。然るに近頃狩野亨吉氏が得られた山齋集三卷を借りて、始めて彼の短歌集を見ることが出来た。そは雅澄の息雅慶の筆で、文化七年より安政五年に至る四十九年間の作を選んだもので、萬葉なる家持の家集の風にならひ自叙傳體に書きとめてある。書式は殆ど凡て萬葉假字で、普通の書式に書いてあるものは極めてわづかである。その詠せる名所の如きも、彼が郷里の土佐の地名にあらずば、萬葉に詠せられた名所である。時鳥や、萩や、七夕を多く詠じたのも、萬葉の

影響である。その歌はよく萬葉の風格を得て、些かも厭味がない。併し又萬葉以外に何らの特色の認むべきものがない。こゝに集中の秀逸を抄出しよう。その書體は原書にならつておく。

吾妹子之待跡之聞者荒熊之住云山毛越不勝申  
哉(戀)

金門田之秋之垂穗之八束穗之穗向乎見世跡月者  
照良之(文化十二年乙亥八月十五日夜應 命賦田家月之題)

鑑河與邊爾沈真白珠清爾見與月者照良斯(同年九月十  
四日夜欲賞月光遊鑑河作歌)

唐之海原懸而松浦方押而照有月讀壯丁(丁丑年九月十三  
日夜應 命詠月滿海上之題)

鳥梅能波奈比々等々與々爾毛呂比等乃知欲能保

吉許等故母理豆安良受也(吉川氏母六十賀篇序歌)

月夜見之光乎清見綿津見乃手纏乃玉能亂相有所  
見(爲文政四年辛巳八月十五日夜月宴應 命預賦海邊月之題)

父爾似而餓鬼等莫成會大寺之金剛力士之爲形等  
乎成(同年十月三日申刻男子出生登時述拙懷作歌)

曲庵之四吉屋之軒之草朽而零春雨之雫漏乍(詠春  
雨)

妹家道近附良之藻天漢川湍母清爾琴音所聞(七夕琴  
擬牽牛之意)

客爾師而家戀敷似乏雲關飛超而往霍公鳥(四月應 女  
公子命詠霧中霍公鳥之題)

天人之妻問宵常道邊之草副四奈布情之有羅斯(七

夕地機

樓似登立爲而國見爲須今宵之月之光清母(爲八月十五

日夜月冥應 彈正君命豫作高樓明月之題)

櫻花今開有如吾盛常如是在者何香將嘆(三月應 女公子

命詠花下言志之題)

秋風之布久爲乃里爾妹乎澄而安藝乃大山超勝奴

鳴(天保二年辛卯八月六日超安藝郡大山之時作)

許知基智乃野之衣寸不落映月似露乎毛玉常誰香

不見將在(爲八月十五日夜月宴應 大學君命詠野露映月之題)

大海之磯之崎々隈毛不落照有今夜之月乃清也(天

保四年癸巳九月十三日夜和食濱仰見月光作)

楚取五十戶長之聲乎將鎮爾今助爾將來久我禰磨

母賀(十二月晦述懷作)

萬葉丹相語羽六龜崗之常石堅石似君者往來瀬(三

月十四日古義軒會松本弘隆歌曰萬葉丹動屋外之向許會龜崗之名者負來數即報曰)

まらつつじ知らぬ山路はとひてまし誰に問はま

しわが古ことを(飯沼直澄に詠へられてよめる躑躅の歌)

痛何怜於會也亞米利加神風之恐事乎汝者不知哉

裳(述拙懷)

○景樹の門下で、師からも重んぜられ、桂園派からも尊ばれてゐるのは熊谷直好であるが、彼の家集浦の汐貝を讀むと、その歌風いかにも平弱で、桂園派の弊をよく代表してゐる。また八田知紀も明治の桂園派の棟梁として重んぜられたが、その家集玄のぶ草を見ると、その歌風は直好と同じ傾向で、その技倆も相似てゐる。彼らには景樹

以上のところなく、景樹以外一步も出たところがない。

吾人は彼らよりも木下幸文をとる。彼の歌は真情流露して人を感せしむるものがある。その家集亮々遺稿中なる貧窮百首は、安政四年の年末から五年の正月にいたる數日間の貧苦の感を歌つたものであるが、その偽はらず矯めざる人情を歌つたところ、讀者をして同情に堪へざらしむる。この百首は彼の萬葉なる憶良が貧窮問答とも比すべく、貧を歌つた和歌の最もすぐれた作の一つで、永久に人をして文人不遇の嘆に泣かしむるものである。そのうちより、殊にあはれなのを抄出すれば、

かにかくとうとくぞ人の成にける貧しきばかり

悲しきは無し

いかにして我はあるぞと古里に思ひ出づらむ母

し悲しも

かたちほも山のましらとなりぬれど人にしあれ

ば心悲しも

大丈夫のをのこさびすと打あげてなかぬ心ぞま

こと悲しき

人のいふ富は思はず世の中にいとかくばかりや

つれずもがな

天地にあふるばかりの黄金もが世の人皆をあき

たらはさむ

奥山の奥に生ひたるゆづる葉も世に出でて春に

逢ふといふものを

思ふ事早も成らなむ今日の日の嬉しき人にむく

いせん爲

まどしきも嬉しかりけりかくまでに人の心の隈

を知らめや

つひにはと思ふ心のなかりせば今日の悔しさ生  
きてあられめや

我宿に何のよろこびうるさく 門さしこめてな  
しといはばや

まき流すにふの柚川にぶくして世に立つよりも  
死ぬるまされり

若菜つむ春べになれば故郷の垣根わたりは目に  
ぞ見えける

我命今まばしかせ黄泉にます親のみことにまた  
すつとなし

鳥のねなきはかへつ今年だに我をにくむな世の

### なかの人

貧窮を歌ひし歌人は他にも少くない。後にいふべき曙寛、野雁をはじめ、垣本雪臣などがある。雪臣には天保八年の歳末の作にかゝる粥原紐士作歌といへる狂體の長歌があるが、眞率を缺いてゐる爲に、幸文の作ほど人を動かさぬ。幸文の作は眞情流露して、よく桂園派の所謂自然のよき方面を代表したものである。

幸文は學力も勝れて、その著亮々草紙の三山歌の解の如き、その獨創の見の稱すべきものがある。彼の文詞また景樹に勝つてゐる。

○景樹の女弟子では高島式部の名が世に知られて居るが、さばかりの才でない。蓮月と並稱せらるゝが、劣つてゐる。信濃の人にして後東京に住んだ秋園古香（はじめ神方升子）も名高い。古香家集（二卷）を讀むに、これとてもそれほどではない。もとより蓮月、望東尼に比ぶれば、その力量も才も劣つて居る。併しその作中には、維新



當時の時勢に憤慨した思想を歌つたものがあつて、異彩を放つてゐる。例へば、

から人の折らまくほしといふらめど櫻ばかりは  
やらじとぞおもふ

異國のことさかしまも我國の神のおしへにあに  
まかめやも

異國に糸をとられて彦星のみけしの錦おりぞ兼  
つる

最後のは、當時外國貿易の爲に國家の富の減するを嘆いたもの、彦星のみけしの錦といふのが、婦人だけに面白い。なほ變つた歌には、

横濱にもろこし船のいかりをろしいかにすれど  
も去らぬ我戀

世中の調によしやあはずとも我腹つゞみうちて

あそばむ(狸の腹つゞみうちとこゝろ)

式部古香の如くその名は知られぬが、景樹女弟子中の第一は柳原安子である。その歌、優しき中に才氣が溢れてゐ、かつ力があつて平弱の嫌がない。その名知られなかつたのは、思ふに上流の夫人であつた爲であらう。その家集は予が續歌學全書編輯の折、柳原家から借りて、はじめて世に公けにした。彼の才藻を忍ぶべき歌を擧ぐれば、

急ぎても歸る雁かな越路には櫻にまさる花や咲  
くらむ

世の中は星の林の事えげきなかにもすめばすめ  
る月かな

夕風になくひよ鳥の聲おちて日かげさびしき杉  
の一村

君ゆけばかへらむ日まで世の中に花も紅葉もあ  
らじとぞ思ふ  
君が舟はるかになりぬ波風も今はな立ちそとめ  
むよしなし  
村肝の心一つに思ふこと命のうちにいふひまも  
がな  
親しきはいつも親しく思ふこそうき世を知らぬ  
心なりけれ  
こゝに來てうき世の人も思ひ知れ木にも石にも  
何か残らむ(墓)  
埋もるゝ身は露霜のふる塚は春だに花の雪に隠  
れむ(寂光院になからむ後の碑を建つとてかきつけたる)

かつて秋の夕暮、洛北大原の山里に、寂光院を音づれて、建禮門院の古へを訪うた折、若き尼の案内にてこの『雪に隠れむ』の歌を彫れる碑を鐘樓のほとりにたづね得て、苔に埋もれたその文字に對して、勝れたる女歌人の上を忍んだ事があつたが、その時の感じは未だに忘れぬ。

○宣長の歌は少數のすぐれた作を除いては、大體に拙い。その學統を汲んだ歌人中で勝れて居るのは太平の門なる加納諸平と田中大秀の門なる井手曙覽との二人である。諸平は眞淵を學び、雄勁にして典雅、萬葉の精神を古今に近き調を以て歌つた。その家集柿園詠草中には、紀伊風土記を編纂する爲に、熊野邊を旅行した折の作に勝れたのが多い。集中より數首を擧ぐれば、

く 姫島の松の夕日に雁鳴て我子戀しき秋風ぞ吹

岩くえて磯わの城門は荒れにしを夜聲寒くもよ  
する浪かな  
みづちすむ淵を千尋の底に見て太刀の緒かため  
ゆく山路かな  
山賤がもちひにせむと木實つきひたす小川を又  
や渡らむ  
打おける板目にきれし黒髪をゆゝしと見つゝ背  
子や歎かむ  
壁たてるいはほとほりて天地にとゞろき渡る瀧  
の音かな(奈智瀧三首)  
高機をいはほにたてゝ天つ日の影さへ織れるか  
ら錦かな

あしたづの翅のうへに玉敷きて神やますらむ瀧  
の水上  
神ならば岩おしわけて歸らまし山路の暮は家ぞ  
戀しき  
若草のみつのみ牧の放ち駒誰がとる鞭に千里ゆ  
くらむ  
天草や天よりをちのから山も雲になびきて日は  
くれにけり

又彼は長歌に勝れ、その技倆に於いては萬葉以后第一人の觀がある。

曙覽の歌はその恬澹寡欲にして氣宇高邁、自ら安んじて世俗に阿らなかつた爲人を  
あらはし、又彼に獨特の洒落の風と清高の氣品とを備へて居る。而してその構想句法

に一生面を開き、尋常の鎖事俗事を捕へ來りて、縦横に馳驅する手腕に至つては多く比すべきものがない。併しその弊は、あまりに自在なる才に任せて作りなした爲、たゞい言に陥り、讀者にとつては、何らの感興を惹起さぬものゝ少くないことである。彼の代表的の作を擧ぐれば、

夕けふり今日は今日のみたてゝおけ明日の薪は

明日採りて來む

國を思ひ寐られざる夜の霜の色月さす窓に見る

劍かな

賤が家はひりせばめて物うゝる畑のめぐりのほ

ゝづきの色

着る物のぬひめくゝに子をひりてまらみの神世

はじまりにけり

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに走る西へ

東へ

影たるゝ星にせまりて薄黒き色たゝなはる朧夜

の山

瑞山の青垣山の神樹葉の茂みが奥に吾魂こも

る

破れたる硯いだきて窓圍む竹看るこゝろ誰に語

らむ

鶏の音によびおこされてうつ石もとる手わなゝ

く曉の霜(寒蟬)

羽ならず蜂あたゝかに見なさるゝ窓を埋めてさ

く薔薇かな

よそありきしつゝ歸ればさびしげになりて火を  
けのすはりをるかな

彼はまた畫をかいたが、その繪畫の趣味をもよく歌にとり入れて詠んだ。歌人にして畫をよくし、畫家にして歌をよくした人も少くないが、彼の如く畫趣をよく歌中にとり入れた人は少い。従つて彼の畫題をよんだ歌は、説明的にして無趣味な尋常の畫賛の作と撰を異にしてゐる。二三を擧ぐれば、

蝶うつとせし手はづれてみ園生の花うちこぼし  
立つ少女かな(美人撲蝶圖)

莖折れて水にうつぶす枯蓮の葉うらたゝきて秋  
の雨ふる(敗荷)

寐まどひて何かく虎の身ふるひに小篠風もつ岨  
の岩かげ(措痒虎圖)

ありとある竹に風もつ谷の奥水の響をそへてな  
りくる(萬竹圖)

樵歌鳥のさひづり水の音ぬれたる小草雲かゝる

松(山中)

吹おろす風の松の葉髯につけ手ふり顔ふり歸る

醉人(松風醉歸圖)

又彼に注意すべきは、その詠史の歌と連作とである。連作は短歌を連ねて長く續いた思想を歌つたもので、彼の集中數篇ある。この連作は上世中世の歌には多くあつたが、近世の歌人にては、秋成などの外、歌つたものがなかつた。その例として、中でもすぐれてゐる、堀名銀山を歌つたものと、紙漉とを擧げよう。

日のひかりいたらぬ山の洞のうちに火ともし入  
てかね掘出す

赤裸の男子むれゐて鏡のまろがり砕く鎚うち揮  
て  
さひづるや碓たてゝきら／＼とひかる塊つきて  
粉にする  
笥かけとる谷水にうち浸しゆれば白露手にこぼ  
れくる  
黒けぶり群がりたゝせ手もすまに吹鏝かせばな  
だれ落つるかね  
鏝くれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る  
白銀の玉  
銀の玉をあまたに宮に收れ荷の緒かためて馬馳  
らす

まろがねの荷負へる馬を牽たてゝ御貢つかふる  
御世のみさかえ

家々に谷川引きて水湛へ歌うたひつゝ少女紙す  
く(以下紙漉)

水に手を冬も打ひたし漉きたてゝ紙の白雲窓高  
く積む

紙買に来る人多しさねかづら這まとはれる垣を  
まゐるべに  
居并びて紙漉く少女見はしがり垣間見するは里  
の男子か  
黄昏に咲く花の色も紙を干す板の白さにまけて  
見えつゝ

鳴たつる蟬にまじりて卓たゞく音きかするや紙  
すきの小屋  
流れくる岩間の水に浸しおきて打敲く草の紙に  
なるとぞ

詠史の歌また異彩を放つてゐる。詠史は古く萬葉に松浦佐用媛面、浦島子などを詠んだのが始で、元慶延喜天慶等の日本紀竟宴の歌があるが、盛に行はれる様になつたのは近世の事である。小野務の詠史百首、加藤千浪の詠史百首、續詠史百首、渡忠秋の讀史有感集、高橋殘夢のやまとにしき及びからにしき、近藤幸殖の讀史餘感等のやうに一人で數多くよんだのを始め、平家物語竟宴歌、三十六歌仙贊の如き、また詠史歌集、河藻集、詠史清渚集、の如き選集も出來た。而してこれらの詠史の歌は色々に詠まれたが、或は歴史的事實に制せられて單に説明的となり、或は理屈や教訓に流れ、又は詞華を弄ぶにとゞまり、歌としては無趣味なものが多い。従つて詠史の歌には名歌

が少い。然るに曙覽の詠史の歌はこれらの弊に陥らず、よくその事實の眞意を捕へてまかも詩趣を失はずに詠んである。彼は好んで詠史を歌ひ、家集志濃夫廼舎歌集中四十餘首ある。その詠み出でた人物は、忠節愛國の士、學者、歌人、隱逸の人などが多い。單に題目の撰擇だけを見ても、曙覽が如何なる人格を慕うて、そを詠じたかといふ點、従つて曙覽自らの人格が解るやうに思ふ。その中の二三をぬき出でむに、

大御門その方むきて橋の上になねつきけむ眞  
心たふと(高山彦九郎正之)

誠あれば地の下にてなく蟲の聲も雲井に響くな  
りけり(御魚屋八兵衛)

劍太刀焼刃に我と身をふれて勵ましやりつ仇ね  
らふ子を(近松勘六行重母)

その眞心をたゞへ、誠をたゞへ、忠節をたゞへた歌である。

木のめ煮てこの頃都うり歩く翁を見けり嵯峨の  
花かげ(賣茶翁)

吾ためは徑もなさぬ桃山の春日のどかに一人ふ  
み見つ(桃山隱者)

二人ともに、その隱逸が曙覽自身に似てゐる。賣茶翁の結句は、一首をしてよく詩化せしめてゐ、桃山隱者の詠はよくその趣を得てゐる。

勢田の橋その人遠く去りて後捨し扇を見ほしが  
るかな(池無名)

かの大雅堂が若い時、晝いた扇を賣りに出たが、誰も顧るものがなかつたので、勢田の橋の上から其扇を投げ捨てたといふ名高い逸事を探つて、大雅堂が天下に名をなした後、人皆が其扇を見ほしがると云うて、世中の眼の低いのを嘲つた歌。評論界の歌としてすぐれた作である。

此筆は眉根つくるふ筆ならず山水かきて脊に見  
する筆(玉瀾女)

初の句は『此御酒は我御酒ならず』云々といふ崇神紀の古歌の成句から脱化し來たもので、夫の大雅堂と共に畫筆をとつて世事に頓着せざりし玉瀾女、風雅の楳深かつた祇園の百合女の娘なる彼の面目、言外に躍如としてをる。玉瀾女此歌を讀んだらば我意を得たりとほゝゑんだであらう。序にいふ、先の池無名の歌、我もてる曙覽の短冊には、『水うみに今はとすてし筆のあとをあたらいふも人あらぬ後』とある。家集にのせたのは、これを改作したのであらう。『其人遠く去りて後』といふ句に無限の妙味がある。『あたらいふも人あらぬ後』は露骨の嫌がある。

勢田の橋其人遠く去りて後すてし扇を見ほしが  
るかな

水海に今はとすてし筆の跡をあたらいふも人



## あらぬ後

此二首を双べて讀み味ふと、詩歌に鍛鍊の必要な事がよくわかるであらう。

○近世僧侶中の歌人としては、先契沖を擧げねばならぬ。彼は前にも言うた如く、その歌には萬葉風の影響が無かつた。眞淵は『龍公美への答』の中に評して、『契沖の古今歌集の註に、よしもなき後世の説までを残りなく擧げて、定家の説などもどくにはいとく憚かりていひし事多し。こは草ざり故にをしくたてたる心の出来ぬなり。歌もその如く巧に馴れたる世中をぬけ出るほどにはいたらで、なまじひに古語など多く胸に有るにまかせてむつかしくは成りつらんかし。今三二十年をも加へなば、思ひ開きぬべき人には侍りしなり。』と云うてゐる。が併し彼の歌は、二條冷泉の堂上風未だ詠み破られざりし當時一般の歌界にあつては、清新の趣を得てゐた。かつ又極めて多作にしてその技倆は凡を抜いてゐた。家集漫吟集中の秀逸を擧ぐれば、

雨まじり風うち吹きてふるさとにちる花寒し春  
の夕ぐれ

我を知る人は君のみ君を知る人も數多はあらし  
とぞ思ふ(長流のもとに)

富士の嶺は山の王にて高御座そらにかけたる雪  
のきぬがさ  
初瀬のや里のうなるに道とへば霞める梅の立枝  
をぞさす

梅の花朧月夜に匂ふなり常にもがもな此頃にし  
て  
吹きに吹きふりに降りぬる雨風にをれにを  
れ散りに散る花

後の世の猶又の世の末の世も生れて死なむ人ぞ  
悲しき  
玉椿それも終には朽ぬべし千代も八千代も夢に  
やはあらぬ  
野邊の露山の玄づくも玄かま川海にいでてはか  
はらざりけり  
吹く風にいつさそはれて蓮葉の露は濁れる水と  
なりけむ  
何せんに浦島が子の玉くしげうき世のやみの明  
けすはありとも

清適の生涯を送つて書と詩歌とにすぐれて居た僧良寛の歌集には、その悠々とし

て事物に執着せぬ爲人も忍ばれて、おくゆかしい作が少くない。その歌風は萬葉風で  
あるが、その弊としては構想と言ふことを殆ど度外視して、その極、余りに單純に過  
ぎる作のあることである。その勝れた作には、

墨染の我衣手の廣くありせば世の中の貧しき人  
をおほはましもの  
山笹に霞たばしる音はさらく　さらりく　さら  
さらとせし心こそよけれ  
霞たつ長き春日に鶯のなく聲きけば心はなぎ  
ぬ  
子どもらと手鞠つきつゝ此里に遊ぶ春日は暮れ  
すともよし  
風涼し月はさやけしいざ共にをどりあかさむ老

のなごりに

いざうたへわれ立舞はむぬば玉のこよひの月に  
いねらるべしや

月よみの光を待ちて歸りませ山路は栗のいがの  
多きに

柴の戸の冬の夕べのさびしさをうき世の人にい  
かで語らむ

飯乞ふと里にもいせず成にけり昨日も今日も雪  
のふれよば

紀の國の高野の奥の古寺に杉のまづくを聞き明  
しつゝ

足引の山田のかやし汝さへも穂拾ふ鳥をもるて

ふものを

うつそみの人の憂けくを聞けば憂し我もさすが  
に岩木ならねば

古への人の踏みけむ古道は荒れにけるかも行く  
人なしに

山かげの石間を傳ふ苔水のかすかに我はすみ渡  
るかも

高砂のをのへのかねの聲きけば今日の一日も暮  
れにけるかも

柴やこらむ清水や汲まむ菜や摘まむ時雨のあさ  
の降らぬまぎれに

景樹に歌を學び、禪を景樹に教へた誠拙禪師は、禪門の名僧である。かつて鎌倉圓覺寺なる佛日庵に禪師の跡を訪ひ、その手書の日記、及び、同じく禪師に禪を學んだ香一居士（熊谷直好）の書いた禪師の家集を見ることを得た。歌風は素より桂園派の風であるが、その思想はさすがに、特色があつて面白い。例へば左に擧ぐる數首の如き。

今日は無し昨日はありとみ佛の姿に迷ふ人ぞ悲  
しき（涅槃會）

まばらくは都となりし津の國の武庫の浦わの初  
雁の聲  
松の葉につゝみかねたる松の聲耳なき人のきか  
すやあるらむ  
心なき風に恨はなかりけり花の行方を誰にたづ

ねむ（法藏主みまかりぬと聞て）

池水の深き濁にまみてこそ花の姿も清くはある  
らめ  
さびしさに門の戸たてゝさびしさの心のありか  
始めてぞ知る  
手にむすぶ清き流のあかの水吾御佛の身にもま  
むらむ  
こそぞの春又こむ春もかくやあらむ風にはころび  
風にちる花

僧侶ではないが、同じく禪門の居士で、禪と和歌との一致を考へ、和歌禪話を著した自得居士（伊達千廣、陸奥宗光伯の父）の歌も異彩を放つてゐる。彼の家集は隨緣

集と言ひ、田邊幽閑中の雜筆に余身歸がある。

あたゝけき南庇に端居しておつる紅葉を獨みる  
かな

夢もなく眠たらへる曙に霞む外山の花を見るか  
な

何しかも物くるしげにうめくらむ月と花との面  
白の世に

争ふもはかなのわざや名取川なにばかりなる名  
をとらむとて

さくも又ちるも春雨春の風まかせて花は安けか  
りけり

富といふ富をつみても得がたきは我身にひめし

實なりけり

月花を同じ心に見む人の一人もあらば何か思は  
む

月清し花もめでたし苧こものかりのうき世はさ

もあらばあれ

はてもなく限も知らぬ大空を心となして月を見  
るかな

かくしつゝ昨日は吉野けふは須磨あそぶ心のひ  
ろくもあるかな

まばしあらば雨の名残の濁り江もすむべきもの  
を花のちるらむ

紀の川のほとり藤崎山の景色よき境に庵をまめて、挹翠琴房と名づけ、行ひのいとましく、月にむかひては琴を弾じ、花を眺めては唐やまとの歌を詠じた僧幽真は、風流の僧であつた。家集の中からすぐれた歌を抄出すれば、

ともすれば琴ひきさして打霞む窓の外山の眺め  
られつゝ(待花)

花山の朝ゐる雲に打のりて心空なり土はふめど  
も(吉野にて)

家とへば家も跡なし花とへば花も跡なくちり果  
にけり(故郷落花)

もとつ人山子規故郷に歸れとなくか家もあらな  
くに

月いでぬいでや舟人棹やめよ風の心にまかせて

を見む

ものは皆たらはぬ草の庵なれど心に富みて月を  
見るかな

月を見て誰かは家を戀ひさらむ野にふすわれも  
人の子にして

小萩さく岡のやかたに琴とりて露ちる夜半の月  
を見る哉

火桶のみわが世の友と手ならして雪のこゑさく  
窓のうちかな

あら鷲の羽ほす雲の八重山に誰が知る人と杉は  
生ひけむ

翁丸いで翁丸こととはむぬし知る道は誰になら

ひし

世の中は此矢一つにさだまるを放ちぞかぬる大  
丈夫にして

おのれよと見れば蝶なり蝴蝶かと思れば人なり

夢の此世や

かすかなる遠山びこの聲のうちにこもる眞は誰

か聞くらむ

同じ紀伊の僧で、和歌の浦なる玉泉院實裕法師に學んだ原實雄法師（また大暎道人といふ）は、柿園の風を慕うて、長歌に長け、詩經を譯したのや、陶淵明をほめたのなど、すぐれた作がある。

彼は家集の始に、『何がしの大徳が、歌は我邦の陀羅尼ぞといへるもさることにて、

はつかなる言葉に無量の義をふくめて、おのづから聖教の旨にかなへり。これやこのゆくも歸るも別れてとよめるは、十二因縁輪轉の意に似たり。さては打わびてよばはむ聲に山彦のといへるも、戀愛の癡情をのべたる歌ながら、おのづから感應道交のむねを含めり。慧心僧都の教子たちに諷詠を許し給へる、はた西行上人の吉水僧正に歌道をすゝめられしなど、皆さる心にこそよられけらし。かゝれば、法師の歌よむは、畢竟觀心の助けにすなり。春のあした花にむかひては盛者必衰の趣をうたひ、秋の夜月を眺めては眞如清淨のこころをのべむに、よしや佛果の近因とはならずとも、いかでか菩提の遠縁を結ばざらむ。すべて吟詠の所縁となるどころ、山水のたゞすまひをばじめ、森羅萬象に此おもひを運びて、心靜に打案じたらむぞよき』というて居る。その短歌は甚しく勝れてはゐないが、なほ左の如きがある。

瀧の上の杉のむらだち月おちて雲井にかをる水  
けぶりかな

いはそゞ軒のたるみの音すみて山静かなる夜  
半の月かな  
山賤が杉苗うゝる袂よりえら雲たちてほとゞぎ  
す鳴く  
あさなくなづる少女が黒髪も藁もて結へる山  
の奥かな(木のめ時にて)  
小草ふむ寧樂の都路春たけて鹿のそびらに櫻花  
ちる  
谷かげやわたり來し世にくらぶれば此かけはし  
も大路なりけり  
行き暮れぬ大川のへの川霧に袖さへぬれてひと  
りかもねむ

折々は山よりいでて世の人のまげきわさをも見  
るべかりけり  
鳥は鳴き雲はまよへど時じくに山のこゝろはう  
ごかざりけり

月影もからくれなゐにかゞやきて火の穂ながら  
にまらむ空かな(文月のすまり九日の朝まだきより都にてたゞならぬこと出

來ぬとて立並べる家のこゝかしこより火起りて限なき家ども見るく炎の山となりぬ  
佛經に三界火宅と説き給へるも只まのあたりの様なりけりあなかしこ)

おこなひの關伽の眞清水雨となりて炎の宿にそ  
そげとぞ思ふ(同じ時根本中堂の御修法の助咒にまかりて)

こがくれの道のまばくさ誰かふむ花より後のみ  
よし野の山(吉野懷古二首)



みさゝぎのみかきの花の雲間より雁の行方や眺  
めますらむ

近世僧侶中第一の歌人は、福田行誠である。行誠は近代佛門の大徳、和歌はもとよりその餘技であつたが、まかも自ら一家をなし、その調にその想に脱俗高遠、彼の徳風を忍ばしめるものがある。彼の遺稿の一節に和歌をよむ心構へを論じて、『よく詠みてほめられたくもなきなり。この妄念は歌よむべき第一の禁忌なり。唯おのが志を正しくすべき爲に詠むが、第一の心得なるべしと思はる。此志は即ち佛の誠め給ふ所なるが、自ら歌にもこの趣はあるなり。山にも高さ低きあり、川にも深き浅きあり。歌にもよきあしき、浅き深きあらでやあるべき。よきあしきはおのづからなる勢なり。只よむべき事と思ひ定むるぞよき。古哲とても千首は千首ながら皆よくもあらず。選べば必よきものあるなり。沙門の歌はさる執着心を離るゝが大事なり。執着心を離る

れば歌も自ら解脱するなり。』と言つてゐる。彼の家集は、落葉集、釋教百首等がある  
其中より擧ぐれば、

法の爲身を捨小舟おなじくはこの荒磯にくちね  
とぞ思ふ

高野山苔のとぼそは静かにて音もきこえず春雨  
のふる

埋火のたえたるをつぐ炭はあれど起しがたしや  
すたれたる道

鳩の杖つくく 看れば昔わが土筆つみつる野邊  
にぞありける

さくら花にはふ吉野の山ながらわがみ佛にたて  
まつらばや

み佛のみ名となへつゝ思ふかな我身もいつの世  
にかよばれむ  
思ふにはまかせぬ春の山風にことしもはやく散  
る櫻かな  
我袖の玉と拾ひてつゝまばやうちつけられし石  
も瓦も  
迷ひゆくやみ路の末のはてをなみはてなく照ら  
す光なるらむ  
いたづらに枕を照らすともし火も思へば人の油  
なりけり  
旅衣たつ日となれば人なみに杖よ笠よといひさ  
わぎつゝ

法の海よしいかばかり深しとも汲みほす迄は汲  
まむとぞ思ふ

○野村望東尼と時代を同じうして、夫の勤王の志を助けた江戸の大橋卷子もまた歌文  
にすぐれて居た。望東尼に比すればやゝ劣つてはゐるが、さりとして幕末の一女歌人と  
して、吾人が忘るべからざるものである。

卷子、父は大橋淡雅、母民子は、吉田敏成の門に入つて歌を嗜み、倭文舎集三卷(刊  
本)を著した。卷子も、敏成及び野之口隆正について歌文を學んだ。夫正順(號訥庵)  
は儒者で勤王の志が深かつたが、卷子は夫と志を合せて、よく困苦の間に處し、夫の  
歿後は風月を楽しんで、明治十四年五十九歳で世を去つた。

卷子に夢路の日記といふ日記一卷がある。これは卷子が一生の悲痛を極めし時、即  
ち夫正順及び弟教中が共に幕吏に疑はれて囚はれ、遂に打つゝきみまかつた間の感想

を書き記したもので、所々に歌がまじへてある。その文章もまた簡素の筆づかひの中々にあはれが深い。而して興味ふかき事は、望東尼もまたこの日記を読んだことで、望東尼はこの日記を見て大に動かされ、一首の歌を詠じて日記の後に記したとの事である。(四二二頁参照)

以下、同日記中の彼の歌を少し紹介しよう。

君が代は静けしとのみうたげして遊びしむしろ  
まき忍ぶかな

これは、黒船來航して國中騒ぎ立つた頃、時事を憂ひて詠んだのである。

なか空の霞にまばしくもれども春の光の照らで  
やまめや

夫正順が時事に慨して書を上つたことが當路の慍にふれ、文久二年正月獄舎に投せられた時、堪へがたき悲しびの中に又思ひ直して詠んだ作。

今まで訪ひ馴れた人々の、公けを憚かつて來すなつたのに、さすがに人心のほども思ひやられる頃、鶯の朝夕たえず庭に音信るゝに、

世の人は音信たえしわがやどを訪ふも嬉しき春  
のうぐひす

望東尼が姫島日記のうぐひすの條(四三三頁参照)も思はれる。

さかしらの風は吹くとも吳竹のすぐなるふしの  
いかで折るべき

夫の眞意のやうく世に知られ來れる頃、そを喜んで詠んだのである。猶その悲しびを詠じたものには、

八百萬神もあはれとうけたまへわが身にかへて  
祈ることろを  
いとしくながめふる屋の五月雨はいつを限に

晴れむとすらむ

夫の罪や、許されて、宇都宮藩に御預となつた時、

雲間もる月の光の照らさずばむなしく消えむ葦

生の露

その喜も束の間、夫は七月十二日病死した。然るに翌月八日に、弟の教中も囚はれの身ながら病をもて失せた。その以後の歌は殊にあはれを極めてゐる。

むさし野の露と消えゆく人よりもおくる、袖の

やるかたぞなき

み國おもふ人のこゝろをいかなれば知らずがほ

なる天地の神

天がける魂の行方は九重のみはしのもとを猶や

まもらむ

うきことは夢となしてもとやめおく名は百千年

さめず有らなむ

卷子には、此外に箱根の記一卷、家集三卷があり、歎涕和歌集二篇には、和宮の御降嫁に就いて詠じた長歌が載つて居る。家集の雜の部から四五首を抄出しよう。

みなと舟碇おろして追風をこころのどかに待ち

わたるかも

いつまでか曇りはつべき高ひかる天つ日つぎの

大宮どころ

あなかしこ仰げ世の人ぬばたまの闇路をてらす

天つ日のかげ

國の爲いく野の道にますらをが霜と消えぬと聞

くはまことか

くれ竹もいまは何せむ弓にきり矢にはぐわさも  
いたづらにして

○最後に言つておきたいのは、井上文雄である。彼は江戸派の歌人の殿として幕末に光を放つた。三百年の徳川幕府の運命に同情した歌を詠じて、勤王の叫の底に潜んで居た當時の一部の人士の聲を代表した唯一の歌人は、彼である。彼はその和歌の爲に當路の嫌疑に觸れ、七十に近い老の身で、つひに入牢した。和歌の爲に罪を許された例は多いが、和歌の爲に入牢したのは古來彼一人というてよい。

彼は江戸で育つた人で、川越に暫らく往つてをつたのみであるが、その割に田園の風物を好み詠んだ。例へば、

岡越の切通したるつくり道うの花咲けり右にひ  
だりに

鶏の音は小坂の村にあけ初て霞をぐらきまのゝ

## めの道

小山田の賤がはひりのうつ木垣ちる花ふみて庭  
鳥のなく

山里は麥まき蠶がひ種おろし老いたる人ぞこよ  
みなりける

打ついき蠶飼よろしき年なれどなほ老人は絹着  
ざりけり

水車うすつくせとの栗林こぼるゝ花を見る人も  
なし

賤が屋のむくげゆひませし竹垣にめじろさへづ  
る秋の初風

等、そのうちの秀逸である。又彼は、王朝時代を詩材とした。即ち、

春雨にぬれく歸る馬ぞひも梅が香まぬ袖笠  
ぞなき

おもと人半部おろす袖くちのあらはなるまで吹  
く野分かな  
酔ひにたる舍人がかほのきぬ配りいづれの殿の  
使なるらむ

古歌によつて詠んだものには、

花さかば告げむの使明日か來むあの山守は物忘  
れせじ

こは、彼の頼政の、『花さかば告げよといひし山守の來る音すなり馬に鞍おけ』といふ歌を、下にふまへて詠んだのである。

彼は又、洒落滑稽の歌を得意とした。

夏の日はいつも長居のまらうどをかへして後も  
なほ長くして  
長き日をうすねぶりする關守が眼をつららかに  
鳴くほととぎす

は、その一例である。次に彼は、神武紀の諷歌倒語といふ語を引いて、摘英集のはじめに、その歌論を發表してゐるが、その時世を諷刺することゝを詠んだには、

世の中は北白川に切る石の片かど見ゆる人のす  
くなき  
世の中は一人のめしひ杖つきて數多のめしひ引  
ありきけり  
あはれともえみしは聞かじよこはまの港入江の  
友なし千鳥

その他の秀逸には、

いさぎよきやまと心をこゝろにてよそには咲かぬ花ざくらかな

限あれば暮れなむとする春の日をなほ暮れのごる鶯のこゑ

旅人の朝たつとよみまづまりてうまやの火影霧に残りぬ

淀河の夜舟のねざめ神さびぬ八幡の神樂とほくきこえて

山里をひと日都にいでしかばかへりて更にすみうかりけり

明ぬらし持夫が唄の聲すなりうまやの軒端月は

残りて

さえとほるひとやの夜床下ひえてねられぬものを雪さへぞふる

最後のは、彼が獄中の詠の一つである。

彼の歌論には特に注意すべきもの多く、その選集よりも家集を重んじたる、平弱の調を繰返して千篇一律に陥れる桂園派の余弊を攻撃せる、用語の自由を最も大膽に主張せる、俳諧歌の趣味を唱道せるなど、卓見がある。

○その他狷介の性を以て世に容れられざりし上田秋成、甚しき貧苦の生涯に甘んじて奇行の多かつた安藤野雁、堂上派のうちにして新しい風を詠み、漢詩を譯した和漢草の著ある千種有功、下總飯岡の里にありて、かつ耕しかつ歌うた田園歌人神山魚貫、旋頭歌を多く作つた海野遊翁、古今今様集を著して今様歌を興さむとした白石千

別、長歌で新しい題目を詠じた大熊辨玉、歌人と言はれては本意ではあるまいが、  
まかも雄邁の思想を歌つて専門歌人の詠と自ら異彩を放つてゐる平田篤胤、明治維新  
の際に出でて、悲憤慷慨の作を残した伴林光平、櫻東雄、平野國臣等諸志士の作、等  
に就いても述べたいが、それは他日にゆづり、今はこれだけにする。

## 和歌の將來

この問題の和歌とは、即ち短歌のことであらうから、其つもりで答へる。

さて此問題は、和歌の將來は如何になるであらうかと云ふこと、和歌の將來は如  
何にすべきかと云ふこと、二つにならうと思ふ。

第一のものは、和歌の將來に對する觀測である。豫言である。斯ることを理論的に  
解決し得るものか否か、出來た所で果してどれほどの功があるか、疑はしい。兎に角  
自分は殊に作家として、餘りその必要を認めない。これは畢竟實際上の解決に俟つべ  
きであつて、和歌の將來は、我々が微力を盡して、出来る丈けそれを創り出してゆく事  
によつて解決すべきであると思ふ。故にこれに就いては何もいはぬが、唯一言してお  
きたいのは、世のよく數學上短歌の作り得べき數に限あると云ふ事から、短歌の將來  
を咀はうとする論についてである。是はもとより早計であつて、現在に於いて我々は



その爲何らの不便を感じない。類想と云ふ事も、それを避ける事が中々に我々の技倆のふるひ所とこそなつてをれ、その爲別に煩はされる事はない。否、更に更に類想と云ふやうなものが多くなつて來ようとも、歌をよむ事が文字の器械的排列でない以上は、その爲累せらるゝ事は極少いと思ふ。

第二の問題は即ち、將來如何に和歌を發展せしめゆくべきかと云ふのであつて、吾人が答へむとするのは此點である。

先づ第一に詩形である。三十一文字の短歌の形式は、將來そのまゝに採り用ゐるべきか、何らか改良を施すべきか、はた又他のものを以て代らしむべきか如何と云ふ問題である。思ふに必ずしも三十一文字の詩形のみ拘はるべきではないのはもとよりであるが、併し又此形式は此形式で、これを捨て若くは變更すべき必要もない。元來和歌二千年來の歴史に考へて、一句の字數に、一編の句數に、長短さまざまの混沌たる中より、短歌の形式が有力になつて、紀記萬葉以來の生命を保つてゐるのは、他に

さまざまの原因もあらうが、又一には此詩形が國語の性質上適合せるものである故で此歴史上に有する根據は、益々複雑に成つてゆく社會に此短詩形は適しないと云ふ位な漠然たることで未だ破れないと思ふ。否、吾人は、社會萬般の事、従つて我々の思想が複雑に成りゆくにつれて、それに伴なつて、短歌にうたふべき思想、短歌の形式に適した思想も益々殖えてゆくと思ふ。吾人は新體詩の將來に期待するところ多く、又適當なる新詩形の生せむことをも欲するが、併し又短歌は、少くともまだ短歌として存在してゆく價值があると思ふ。

従つて二千年來の長い歴史に、短歌の妙所は大抵發揮し盡されたと云ふやうな臆説は顧みるに足らぬ。古來、時代により、作者により、いろ／＼な歌風はあるが、つまるところ、萬葉風、古今風、新古今風の三つの風をいでぬ。吾人はまだこれ以上に和歌の境域を開拓し得ると信ずる。

これは和歌に對する吾人の信念である。次にその將來發展せしめゆく理想ともいふ

べきものについて述べよう。

十數年前から、文壇に和歌の革新てふ事がいはれ、吾人もその一人として、自ら聊か微力を盡し又盡しつゝあるが、此革新といふことは、畢竟從來の歌風に對する自覺的反抗であつた。當時の歌壇は、景樹派の所謂調への末に流れ、歌はまごころであるといふ説の弊に陥りて、唯ありのまゝをのみ述べて何等の生命なく、構想題目の陳腐平凡を繰返し、歌の藝術品たる方面などは閑却して居たものであつて、是に對して吾人が反抗し主張したのは、まづ着想といふことを重んじ、詩趣といふことを眼目としたことである。而してこれと共に、從來の形式的な、狭く限られた和歌の天地を、もつと自由な、深くも廣くも、大きいものとし、専らわが衷にまことに感じた、いきた感想はもとより、いろ／＼の境遇、いろ／＼の性情の人の心になりかはつて、その様々の事物に對して抱く思を自由にうたふといふ事を根本とした。これは吾人がその時以來、今に至るまで探つてゐるところで、思ふに將來の和歌に對する覺悟も、此理想を益々

實現してゆくのみで、根本に於いてはこれに變らぬ。

かかるが故に、吾人は和歌に用ゐる詞や、その語法などに於いても自由な考であつて古語の復活はもとより、(紀記萬葉の歌などには、詩趣のある語が多くある)俗語も、新造語も取り用ゐる。併し此方面に對する吾人の考は寧ろ漸進的である。思想や着想の清新自由といふ事に比しては、詞や句法は、和歌そのものゝ風致といふものを損はない範圍に幾分抑制して、漸次に進んでゆきたい。詩歌に於いては、或る程度まで舊き革囊に新しき酒を盛つて行かねばならぬと思ふ。否少くとも酒を換ふるに先だつて、囊を換ふべきでは無いと思ふ。吾人は此故に、徒らに言語の技巧の末にわざとらしき新奇を弄する歌をとらず、又口語のみを以てつづる和歌を俄に詠まむとは欲せぬ。さりとして彼の擬古派の、たゞ古言古風にならふのに反對するのはもとよりである。それから、如何なる方面に將來の短歌は發展せしむべきかといふ事に就いては、その大體のことは已に言つた通りで、深くも、廣くも、大きくも、細かくも、凡ての點

に於いて發展せしむべく、和歌本來の、情を述べ景を叙して、或は優美繊細に、或は餘韻的なる特長はもとより、又莊重雄健の調平淡の風等も發達させたい。が、是と共に、更にその以上に、古來の歌に寧ろ欠けて居た思想の深み、或は人事に於ける滑稽とか洒落とかの趣味、また格言めいた理屈に陥らない趣ある諷刺のやうな風も詠み開いてみたい。殊に後者には、その短詩形たることが大に便利をなして居ると思ふ。從來の單調を破つて、複雑なる結構をとらへるといふのはもとより望ましいが、よく趣向の中心をとらへて、徒らに混雜の感あらしめない用意はどこまでも必要であらう。長い詩形にうたはれと思ふやうなのを無理に押込んで、その弊難解に陥るやうな歌は吾人はとらぬ。複雑なる思想を歌ふには、古くあつた連作といふものゝ如きも、なほ新らしく詠み試みて見たいと思ふ。どこまでも短歌は短歌として發展させたく、又發展せしめ得ると思ふのが自分の考である。

大體以上の如くであるから、此處に筆をおくが、最後に一言しておきたいのは、社會一般の趣味の開拓に於ける和歌の力である。この力の大きなことは、吾人は長き經驗上たしかに認めてゐる。こは言ふまでもなく、將來國民文學の美しき花を咲かじむべき土地を耕すといふ點に於いて、見のがすべからざることである。また一つは文學上修養の豫備としての價值である。自然人事のこまかき情趣に心を潜めるといふこと、短き詩形のうちに長き思想をこめて完たからしめる工夫、いづれも少なからぬ功があると思ふ。此點から見ても、和歌は將來益々盛に發展させてゆくべきである。

以上自分の思ひ浮んだまゝを述べて見た。幸に諸氏の高説を聽いて自ら開發するところがあらう。(早稻田文學社の問に答ふ)

## 補遺十六則

## 『仙覺以前の萬葉研究』補遺

## 一 俊成卿の萬時に就きて (三八頁参照)

俊成卿の萬時は、續群書類従目録に、卷第四百五十、俊成卿萬葉集時代考稱萬時考、定家卿長歌短歌説、とその名見えたるに、その書は殆ど傳はらず。東京帝國大學圖書館本、靜嘉堂文庫本の續群書類従また之を缺けり。然るに定家の長歌短歌説の方は、世にも傳はり、多く知られたるに、その終に、萬葉集時代事云々の一節あり。かつ又定家のその説は、爲相の柿本人麿官位並時代考、さては拾芥抄等に引用せられて世にひろまれり。これらの爲にや、古くより、萬時考は定家が長歌短歌説の後にまゐるその一節と混同せられたり。徹書記物語を始めとして、近くは萬葉集書目提要、國書解題、

又これを混同して記せり。水戸彰考館藏本の長歌短歌説には、萬葉集時代事云々の一節に附箋して、以下萬時と稱すとさへ記せり。然れども元來萬時の書は、續群書類従の目録に記せる如く、長歌短歌説とは別なる俊成卿の著にして、宮内省圖書寮にその古寫本を藏せり。世に多く知られざるものなれば、その概要を記す。

この書は一卷より成る。後京極良經の間に俊成の答へたるもの、消息體にて記せり。はじめに、

萬葉集時代事、もとより一方に定めがたく候て、論じあひたる事に候。

といひ起して、古今の神無月の歌、古今の序世繼の文を引き、ならの帝と平城の混同を辨じ、顯昭が大同の撰といへるを難じ、人麿赤人の時代、家持の官位等に就きて記し、終に、

あらはに聖武天皇位をおりさせ給ひて、孝謙天皇位におはします頃の集とは見えて候へども、たれ承りて一定えりたりとも、いづれの帝の御言にてありとも、確かに書きたるものは何も見え候はず。諸兄大臣は、天平勝寶八年、聖武天皇のうせさせ給ふ年致仕、次の年うせて候へば、人の程まことに承りてえらんもあたり

たる人に候へども、物などにうるはしく書きたる事は見及び候はず。人のつかさ世の有様にて、あらはに聖武御時の事とは見え候へども、さまざま論じいさかひ申あひて候。

やすくと人の知りたる事にて候はぬ也。昔の事は、何事もかすかにたしかならず、人の心しなやかに心にくく候へば、物をあながちにあくまで沙汰する事も候はず、書きつくる事も、申さばしどけなき事多く申しちらして候を、世の末には、いかにせむと知らぬ事をも知り顔に、見定めぬ事をも事をきるやうに申あひて候へば、きよくも又ながましくも候也。

これより過ぎてたしかなる説は、誰もえ申候はじとおぼえ候。

と、とぢめたり。奥書に、

此一卷就後京極殿千時御尋所被注献者也。五條入道御消息也。正本は在于九條殿云々。

桑門 潤 爲

とあり。

## 『歌格の研究に就きて』補遺

### 二 小國重年に就きて (六六頁参照)

近き頃、内山真龍撰の古歌集(寫本一卷)を得たり。その書の終に、小國重年が、享和二年、天野重信にあとらへて寫さしめしよし記せり。又小國重友といへる人の著なる、長歌百人一首一卷(明治十八年七月稿)を見たり。是に於いて、重年對真龍の關係、及び重年と重友との關係について知らまほしく、遠江小國神社社務所に問ひ合せつるに、その答により、それらの點をはじめ、二三明らかにし得つるものあれば、左に記す。

一、重年は明和三年四月十二日に生れ、文政二年正月七日、五十四歳にて歿せしこと。

一、重年の父は貞實といふ。重年に弟あり、日坂宿八幡の神主朝比奈家を相續せし

こと。

一、長歌詞珠衣を著はし、は、享和元年にして、小國神社所藏重年自筆の珠衣に、序歌の末に、享和のはじめの年二月十一日とあり。卷六の終に、享和の元の年なが月と記しありとのこと。

因にいふ。これによりて見れば、彼の珠衣の著は、真龍の日本紀類聚解の謠歌解よりもはやくして、著書よりいへば、實に重年を以て歌格研究の祖とすべきなり。

一、まかも重年は、真龍の門に學びたること。そは、重年の六十四日祭に、その學友山下正彦のよみし誄文の中に、『正彦、此大人と學の兄弟にて、天明といふ年の號の初の年、内山真龍主のもとに參り、大御國の古へ書、唐國の書、佛の書も打まじへて讀み習ひ』云々とありといふ。

一、重年子なし。歿後、三河國六所神社の神主大竹家より男子を迎ふ。そを重則といひ、其子重友にて、文政八年十二月一日に生れ、明治廿二年十月十一日、六十六歳にて歿せしこと。

### 三 西田直養の萬葉集長歌格に就きて(七一頁参照)

近き頃水戸潜龍閣藏書中にこの書を見るを得たり。(もと高田與清藏書) 一卷二十葉の小冊子にして、總論六葉と本文十四葉とあり。本文は長歌の例を分類して擧げしのみ。總論は彼舍漫筆所載のものを訂正せしとおぼしく、漫筆の説よりはやく詳細なり。世に稀なる書なればその要點を左に抄出すべし。終の方に記したる、『かく格調の方……』の一節は、いたづらに古風に拘む尋常歌格論者と見識を異にするを注意すべし。また最後の二節によりて、彼が古風三體考を見しこと、その著作年月をも知ることを得たり。

一、長歌格調の事、人の殊更に定めしものにはあらざれど、委しく見てもゆけば、おのづから七種にわかれ

たり。試に名目をつくる時は、輕起穩結、輕起巧結、重起穩結、重起巧結、序起穩結、序起巧結、承初結末、とやいふべからむ。此外に聯句にて起る格あれど、そは別にわかつまでもなければ、本文いたす處の長歌にまゐしをつけ置きぬ。

一、集中を見わたすに、十にして七八までは、重起穩結、輕起穩結の二つの體なり。

一、聯對にて趣向をあやなすに、二句聯、四句聯、八句聯、反覆聯あり。

一、長歌に聯對のあることは、詩の律體の如くなれど、又時と異なるは、長歌の聯句は、始終連續せず、二句聯、又は四句聯、八句聯などを處々におき、彼の反覆聯もて、打かへしめて、其間ことにはたゞの句をいれまじへたるなり。さて聯句のしひて無きもあれど、此聯句なきはむげに拙し。面白き歌には必ず聯句多し、かの長短はさらなり、反覆聯などにてあやなせるなり。此聯句のこと、早くより心づきぬれば、集中なる聯句をことごとくぬき出し、四季戀雜に部をわけ、聯句抄といへるものをあらはし、それに委しく出せれば、こゝにはいはず。

一、かく格調のこと、おのづから定まりあればとて、たゞあながちにこれになつむべからず。たとへば初を輕くいひおこせば、必ず末を穩に結ぶべし、又初を重くいひ起せば、必ず末を巧に結ぶべしといふにはあらず。こは其よみ出る長歌の語勢によりて變化自由なるべし。

一、結句は、五七七とちむる事、定格なれど、又いろくあり。こは田中芳樹の古風三體考に委しければいはず。

天保九年三月

西田直養識

#### 四 足代弘訓の萬葉釋例に就きて

春庭久老大平に學びし伊勢山田の碩學足代弘訓（天明四年歿、安政三年歿、七十三）の萬葉に關する類纂の書（萬葉類語九十五卷、萬葉名所部類十卷、萬葉音訓五卷、萬葉槻落葉辨誤一卷、萬葉延約一卷、萬葉頭字部類四卷、萬葉卷々之時代一卷）の中に萬葉釋例一卷あり。そが中に、

長歌に句を省く格

言を省きて意を合むる例

句を入替へて歌をさく例

詞を上下する例

歌格の研究に就きて補遺

長歌に七言の句三句つゝきたる例

上下にて切るゝ例

の目をあげ、類例を示したり。單にその例を並べ載せたるのみにして、何らの説明もなく、従つてさばかり價值ある書とはいひがたけれども、これまた上世の和歌の修辭に關係せる書なるをもて、記しそへつ。

## 五 草鹿砥宣隆の天門抄に就きて

草鹿砥宣隆（文政元年生、明治二年歿、五十二）は、三河國寶飯郡砥鹿神社の社司にて、天保五年平田篤胤の門に入りし人。天門抄（寫本一卷）は、上世の歌を、主として段落の切り方より分類せしもの。その目に、三つに斷れたる格、中間にて斷れたるが末の短き格、中間にて斷れたるが末の長き格、中間にて斷れたるが其末短歌の句

法にあへる格等あり。以てその分類の一端を見るべし。中に、著者の見識見えて注意すべきは、片歌と短歌とを續けたる格、短歌と片歌とを續けたる格の二格を、特に擧げたることなり。又彼は問答といふことを注意し、問答の格、片歌の問答、短歌の問答の答、片歌の問答の答等の格をあげたり。卷末に、草鹿砥宣隆輯、森田光尋訂、嘉永五年九月廿五日校正了、とあり。光尋は平田門にて、宣隆の指導をも受けし人なりと云。

## 六 旋頭歌四體に就きて

旋頭歌四體（一名旋頭歌抄、寫本一卷）は、こも宣隆の著にて、序の終に、嘉永元年十一月四日と記せり。旋頭歌の格を論じたるものにて、彼は、旋頭歌は本來片歌を繰返したるものなりとなし、その形を以て旋頭歌の正體とし、他を變體となし、一方より



は又四種に分けて、上れる世のふり、問答のふり、中つ世のふり、後世のふりとなせしむべきものは、このうち、第一の上れる世のふりなりとの説なり。この書訂正のあとありて未定稿とおぼし。

又、宣隆には、萬葉集序歌抄一卷（萬葉集中の序歌を輯めて分類し、それを五十音に排列せるもの）長歌對句類集一卷（萬葉集の長歌の對句を集めたるもの）の著あり。

### 七 野之口隆正の六句歌體辨に就きて

六句歌體辨（寫本一卷）は、野之口隆正が、安政四年九月宣隆の家を訪ひて、旋頭歌四體を讀み、それに對して自説を述べたるもの。彼自らの言ふ所によれば、彼にはこれに先立つて詠歌格調辨といふ著（未定稿）あり。この六句歌體辨の説は、それに基づ

きしものと見ゆ。さて隆正の説は、宣隆の説は六句の歌は皆旋頭歌と思ひて説き、誤に陥れるものとし、更に精しく六句體の歌について究め、旋頭歌體、混本體の意義を明らかにし、佛足跡體、六句小長歌體等についても述べたるものなり。その説傾聽すべきもの多く、精到の見はるかに宣隆の説に勝れり。特に六句體として論じたるは、卓見と稱すべきなり。

### 八 高須葛根の歌格分類抄に就きて

高須葛根（文政十年生、明治廿五年歿、六十六、中山美石、及び石川依平の門人）は遠江敷知郡新居村の人。歌格分類抄（寫本二卷）は、八木美穂の長歌私編の體裁にならひ、また宣隆の天門抄の説によりしものとおぼしく、或は段落、或は長歌短歌連續の關係、問答體、その他、對句の有無等より、紀記を主として、萬葉の長短歌を分類し

たれど、その分類雜然として、明確を缺きたり。卷末に、明治廿一年、及び明治廿二年抄了、葛根。とあり。

### 九 橋本直香の旋頭歌解に就きて

橋本直香（明治廿二年歿、八十三歳、上野歌解、萬葉私抄等の著者）は橘守部の門人にして、旋頭歌解三卷は明治五年八月の著。稿本のまゝ傳はりて、未だ刊行せられず。この書は、紀記萬葉古今より旋頭歌をとりいでて註解したるなるが、さすがに師の學風を受けて、その註解もこゝかしこに平凡ならぬふし見ゆ。彼が古今集以後のものを選びざりしは、素より旋頭歌の正格の上代に存することを考へし故なり。終のかたに、彼は、旋頭歌はなほ今の世にもまねびよむ人あれど、上代には、更に外に定まれる格種々ありし由を言ひて、三句格、四句格、五句格（短歌とは別に）、六句格、八句

格、（それらの句の字數は五、七、と調へらず）の目をあげ、紀記よりそれに當る歌を挙げたり。總じて彼は、その師とともに、上代の歌の謠ひ物としての面白みといふことに着目せしにて、彼がかゝる諸々の格に注意せしもその故なり。これ他の學者の多く看過せしところ。終にあつて彼は、これらの古代の歌の、その句格さまざまなりしが、五七の調となり、所謂長短歌となりし次第を論せり。彼曰く、

今按ふに、推古天皇の二十年、百濟人味摩之歸化曰、學三千吳、得伎樂傳、則安置櫻井而集少年、令習伎樂傳、於是、眞野首弟子、新漢齊文二人、習之傳其傳、とみえたるが、異國の伎樂をまねびたる始にて、その後類に漢風行はれて、物も何も多く彼國をまねびければ、唐樂はもとより、高麗、百濟、新羅、多爾等の伎樂までもてあそび給ひしほどに、古より傳へ來し皇國の雅曲は、やゝゝに廢れゆきて、終はまねぶ者もあらずなりにけむ。さるを柿本人麿大人、獨り五七の調をむねと歌はれしが、優れてめでたかりしかば、皆その調に推移りて、奈良朝にいたりては、歌よむとよむ人、皆この大人の口風くちぶりをまねびぬ者として一人もなく、詞をさへに其まゝに移しとりて、互にもてあそびしかば、古へはあらぬことなり行きて、長歌としいへば、五七とつらぬるものゝことなりなり。かく歌の盛に成かへりにし奈良朝の頃ほひすら、上古の高き調へなげ知る人もあらぬばかりに成にしを、まして古今集の頃に至りては、その五七の調へなげ忘れはてし、逆まに長き調へは七五とつゞくものと思ふる云々。

と。上代に於いてさへ五七の調の有力なりし事實に思ひ至らざりし彼の考は、精しとは言ひ得ざれども、人麿の天才が一世を風靡せし點に注意せしは稱すべきなり。

『建禮門院右京大夫』補遺

十 屋代弘賢の夕霧尼考に就きて (二三四頁参照)

扶桑拾葉集作者系圖、世尊寺家略譜等に、建禮門院右京大夫が夕霧尼と號せし由みゆるに就きて、疑を存したりしに、水戸彰考館藏書中に、屋代弘賢の夕霧尼考一篇を見るを得たり。その説に曰く、

建禮門院右京大夫、父伊行、母 夕霧、大神基政女、と大系圖に載すといへども、母の字、夕の字の間、あまりに遠き故、夕霧は右京大夫が一名かと思ひ誤りて、諸本多く誤れり。今案に、著聞集云、

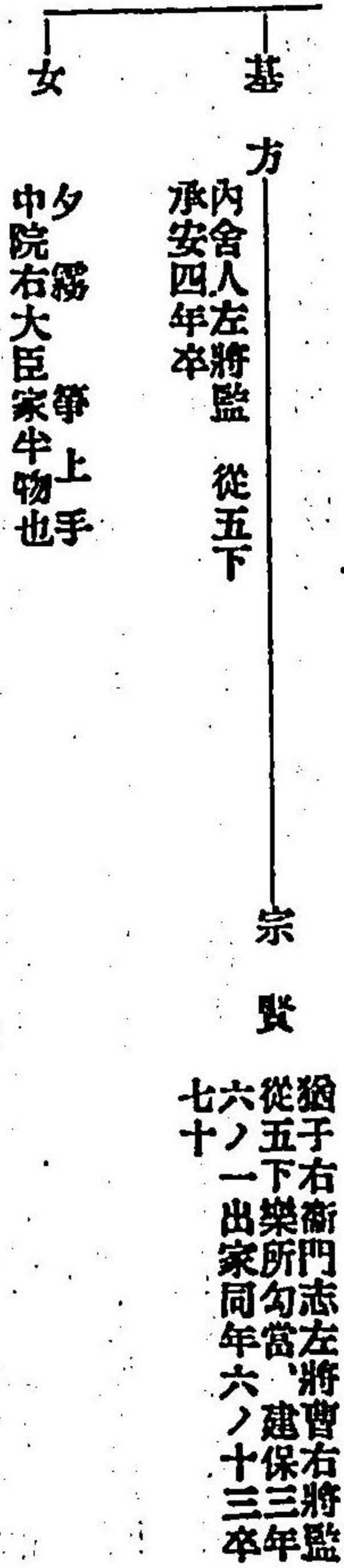
大神元政、多近方がもとへ早朝に来れる事ありけり。近方急ぎ出あひたりけり。元政が云、今日は、元賢に拍笛ふかせむ料に参れるなり、百千の秘事を教へたりといふとも、舞人の御心になはざらむ笛ふき、何にてもあるまじ、元政年たけて、命今日明日とも知らず、然ればこれを聽かせ申さむと思ひて、今日は具して参れり、大事ありとも、たがはずして聽き給へ、といひければ、近方興に入りて、成方並に近方が未だ小童にて有けるを呼び出して、舞はせて、笛を聽きけり。終日吹かせて、拍子をあぐる所事をした

めき。近方殊に感じ申しけり。元政涙を流して、悦ぶ事限なし。さて元政云、右の樂は今日したまひぬ。秘曲なば皆傳へ教へ候ぞ、此上はおのづから不審ならむ事をば、妹の女房にいひ合すべしとぞいひける。件の妹は、女房ながら元政に劣らぬ者なり。安井の尼とぞ云ける。夕霧事か。

この文に、かく疑ひしるすといへども、新勅選和歌集に、「大神基賢がみまかりにける時、誦經させ侍りけるにより侍りける。中院右大臣家夕霧、別れにし日は幾日にもなられども昔の人といふぞ悲しき、是はまさしく、基賢兄妹のよしきこえたり。然れば夕霧はいよく母の名なるべきを、作者部類に、「中院右大臣家夕霧、左近將監宗賢女」と記せり。又疑はしき事なり。宗賢は基政が改名にや、別人にや、更に紛々として辨じかたし。」(以上夕霧尼考全文)

と。然るに、系圖纂要によるに、

大神朝臣姓



即ち、夕霧は、弘賢の説の如く、右京大夫の名にあらすして、その母の名なること明らかなりといふべし。而して又彼が最後に疑へる、作者部類の宗賢女云々の文は誤にして、基政女とあるべく、宗賢は夕霧が兄の子なることを知る。吾人はこれによりて、右京大夫が家系を詳かにする事を得たと共に、その母が音楽の道にいみじき才ありしことを知り、かくの如き家に右京大夫の如き女歌人をいだしたことの偶然ならぬを思ひて、深き興あるを覺ゆ。

## 『戸田茂睡』補遺

## 十一 茂睡の著百人一首雑談に就きて

こたびゆくりなくも、茂睡の著百人一首雑談を得たり。もと、兩角寛翁の所藏せられしを、翁より贈られしにて、此書の名は、かつて所見なしと雖も、その體裁、その所説、はた文體等より考へて、彼の著たること、疑ふべからず。希世の珍書といふべきをもて、解説すること次の如し。

上下二卷の寫本にして、卷末に、元祿五申年七月十八日露寒軒梨本隱家茂睡記之、とあり。彼の季吟が拾穂抄を著はし、(天和元年霜月)よりは十一年後。而して契沖が百人一首改觀抄を著はし、(同序に元祿五年壬申季夏とあり)と殆ど同時。難波と江戸にこの二著ありしこと、又一奇といふべし。彼がこの書を著はし、由來は、その自ら卷末に記するところに明らけし。曰く、

身なわけし程親しき人の、此百首を物語りせよと度々のたまひしにより、他人の聽く事にもあらず、折々雑談し侍りし。然るに、今聞覚えても忘るゝは習ひなり。引歌なども數多あれば、逆もの事、雑談の趣きを記し給はれと、是又わりなきのぞみに付て、書て遣したりける下巻を手前にも留め置きて見るに、あやまりの多きを悔い侍るばかり也。

と。

この書、まづ總論に於いて、この百首の眞價を説破せり。曰く、

此百首は、定家卿の秀歌を選まれ秘説相傳の歌どもなりといひて、講釋をして師弟の契約の中だちにせむとせしゆゑ、此百首は新古今をおすべきため、新勅選の前に選まる、然るゆゑ此百人一首と新勅選は、二條家の歌の髓腦骨肉なり、とかきたり。これ諸人に深く思はせむ爲の辭言なり。

次に俊成の喪にこもりて云々の説を破り、あながち秀歌を選びしものならずと難じ、順序の誤ある事をいへり。(契沖の改觀抄にも『必ず作者おのゝ秀歌の中の秀歌として選ばれたるにも有るべからず……新古今集は花過たりとて、我本意をあらはさんが爲に此百首を選せられしやうにいへる古抄の説、百端なれど、甚だ信じがたし』とい

へり)。

かくてつきくに歌をあげ、作者の略傳、歌人としての褒貶を載せ、さて歌の出所その詞書を説き、歌を解し、かねて批評を加へ、又そへて彼が歌論を述ぶ。その中心となれる思想は、梨本集に於けると同じく、秘説相傳を破し、制詞のいはれなきを論ずるにあり。梨本集の思想は、實にこの書に胚胎せり。而して彼が解釋は、尋常一様の語釋にとゞまらず、眞にその歌の情趣を明らかにせるものあり。その間にはさめる歌論は、彼が卓見を示してあまりあり。その文辭また巧妙にして、人をしておぼえず讀了せしむ。殊に、その考證に、その比較に、引證豊富にして、彼が和漢の學に於ける造詣のほどもうかゞはる。殊に萬葉源氏等にいたつては、隨所に縦横に引用し、彼が如何にこれらの書を熟讀せりしかを示せり。彼は當時にありて、實に古典に深く、かつ博學強記の人なりしならむ。また彼は定家をおとしめて顯昭をあげ、六條家の爲に二條家を非難せし文、いたる所に見ゆ。新古今を難せしもの又所々にあり。

要するにこの書は、うひ學び、百首異見等のいでし今日より見れば、なほ舊習に囚はれたるあと少なからずといへども、當時に於いては、たしかに推奨するに足るべき名著なり。その拾穂抄に對する(後に掲ぐべき文の一節)批評、

『總じて拾穂抄は、諸註又開書などを集めて、その通りに書き載せたるまでにて、吟味しては書かざる故』云々の言の如き、又以て彼が見識を伺ふに足る。

終に一言す、かの新齋夜話によれば、茂暉は徒然草を講せしよしなれど、此書には又、彼が伊勢物語を、雜談(講義)せしこと見ゆ。

以下、この書的一端を紹介せむが爲に、本書中彼が意見の伺はるゝふしぐをとりいでて、二三の目のもとに掲げおかむ。

一。制詞を難す

一 遠慮はかり詠まじきと云ふ詞おびたしくあり。尤も制の詞よりはじめて、ぬしある詞と云ひ、好み詠まじき詞は、かかるべき詞などいへり。それはその時の様子、その節に従つて禁忌あるべければ、其席によつて遠慮もはかりもあるべし。人の咄に云ふ、森家にて子息出生の祝の會にて、森のこがくれと詠みしはあやまり也。

わたましの祝儀の會に、春のひの軒端に見えて、など云ひしは憚るべき詞也。如此遠慮氣遣あるべきところを申たきものに候へ。然るに、みじか夜といへば、みじか世にきこえてあしければよむまじ。玉の小柳の、玉の緒や無きと聞え、明けぞしにけん、紅葉しにけり、獨し寐ればは、死に、死ぬるといふに聞えてよろしからず。草の原といふも、花の宴の卷の歌に、やがて消なば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ、と云ひ、狹衣にも、草の原さへ霜がれて誰にとはまし、など詠めるも墓の事也。然れば、草の原とも、あさはか跡はか、などの詞も遠慮すべし。門させりなども、閉門に開ゆるなどと、榮雅の抄にも見えたり。如此段々遠慮せば、後には、鳥けたもののなくといふも遠慮し、露霜の消ゆる、烟たつ、野をやくなど云ふ事をも、はじかる事に成ぬべし。

二 夜もすがら、と云ふ詞をも、何やらんに、好み詠むべからずと有し也。かやうの詞を制すると云ふは、とくと考へて見侍るに、たとへば、夜もすがらと詠みたる歌あるに、その歌に、すがらのせんなければ、判の詞に、夜もすがらいかにぞや、などと書付られたるを見て、夜もすがらとは詠まじき事ぞと思ひて、定家卿の判の詞に、いかいとありつるまゝ、遠慮すべし、好み詠むべからず、といふにや侍らむ。もし又、別にをしへもあり、譯もある事も有べけれども、さやうにこまかに學をする人は稀なるべし。制とあれば、人のきよを思ひ、身の程を顧みて詠む事をほじがる。さらでだによく詠む事はならぬ事なるに、様々の制ゆゑ、こゝにつかへかしこにおさへられて、此道のはかゆくべきやうもなし。今御靜謐の世には、昔の關所をさへ守らず、往還の旅人も滞ほる事なく心儘に通り、千秋萬歳の御代の御政道に、昔よりいひきたりて悪き詞にもなき詞に關をすゑ、和歌の浦藻屑をもせかれぬれば、玉藻を拾はむ便りなし。これも私の關にて、往還の人の方より關錢をとる手だてなるべし

や。歌の道をひろく世にさかんにして、人の心を和らげ、情の道を知らしめんとならば、關を破りて道をひらき妨なくしてよきあしきを見わけ、よき風體を教へ、悪しき風體を卻けて、直き姿になしたきもの也。

二、歌の理想を述べたる

一 朝ぼらけ宇治の川霧たえぐにあらはれわたる瀬々の綱代木

夜の程たち渡りし霧のほのくも明けゆく頃、川霧も晴れゆくに順つて、その霧の絶々の間に、瀬々の綱代木もあらはれて見ゆる眼前の景氣を、そのまゝ云ひ出せるなり。かやうに上下の句詞やすくつくろふ所もなく、面白き景氣をそのまゝに云ひ出して、景氣の感情見るやうに詠める、是等が歌の上々といふものなるべし。蘆の丸屋の秋風、もれ出る月の影、霧たちのぼる秋の夕暮、いづれも眼前の景氣絶言語歌也。風體のかはりたる故、今はかやうなる歌なし。

二 秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ

此歌、いひのべたる道りにてきこえたるよし、諸註諸抄にいへり。歌のから高く、眼前の景氣をそのまゝ云ひ出でて、詞のつき面白く、かやうなる歌を上々の歌といふ手本にもすべし。色々の心をこめまゝの餘情を云ふは、前にも申たる如くつくろひものにて、歌の本意にあらず。此歌おもてにて聞えたる道にて何の事なしと云ひても、詞ついきすなほに、かやうにから高くよみ出す事はならぬ事也。

三 新古今の頃、上手達面々に、心も風情もいたらぬ隈もなく求め詠じ給ふ。それより後の上手たち、いかほどか心を碎き詠まれし故、其如く詠み候ては、同じ事を二度となふる如しとて、玉葉風雅には、風體をかへて詠ま

れし也。その頃は猶人の心われ意地ましになりて、爲兼の風體をあしきと云ひ、相續する人もなく、名人も出來ずして、其後、道通院實隆公、後柏原院、風體を改めて又様々に詠み給ひしかば、末の世薄根の人のいよく詠む事かたき事になり侍る。近世のをしへ、第一同類をまねかれ、めづらしきを求め、詞にまとはれずして心の筋を云ひたつべきとあれども、其めづらしきを求むといふ事なりがたき事に侍る歟。古くも定家卿の教にまかせて詞は古きを以て先として、一首のうち少しなりとも色にほひをつけて詠むべきにや。如此の教はうけ侍らざれども、近代歌所に仰付られし公家衆の御歌を考へ申して、如此存し仕る。さて右の淺茅生の歌は、しの原のしのの字にちなんでしのぶれどと云ひ、しのぶれどあまりてなとかと云ふ也。此歌に露と云ふ事は見えれども、淺茅生は露しげきもの也。小野のしの原も露しげき也。あまりてといふは、淺茅生小野のしの原の露あまりて也。此あまりてといは入序歌也。随分忍へども忍ぶにあまりて人の戀しき也。昔の歌はそのものをいはずして、たしかにそれと聞ゆるやうに詠みたる故、吟する程く感情ある也。今の歌はすぐにその心を講釋するやうに詠む也。さなければ聞えかねると云ふ也。時代の風體なり。

三、新古今に論じ及べる

一 嵐ふくみむろの山のみぢ葉は龍田の川のにしき也けり

三室山は、龍田の川上にあり。

龍田川もみぢ葉流る神なびの三室の山に時雨ふるらし

此歌を本歌としてよめり。能因の歌には、散るとも流るとも詞になうして散り流るゝ風情あり。景氣と所

のさまと思ひ合せて見侍るべし。能因の歌の風、つくるひ飾る事なく、眼前の景氣心にある事をそのまゝやすく云ひ出せる也。秋風ぞ吹く白川の關の歌、この龍田川の紅葉の歌、

夕されば鹽風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なく也

山里の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞちりける

皆かやうに詠まれし也。是歌の本筋目にて、手本になすべしと思へども、新古今の時代、詞の花さかんにして實あらずといへども、心ふかく面白く遊興のもてあそびとなれり。新古今の序に、色にふけり心をのぶるなかつちとし、とあり。此、色に耽りといふは、詩經に云、周南召南の詩の心にいへりといへども、此序の心は全くそれにはあらず。いはゞ國を治め人の心を和するなかつちとしてこそ有べき事也。色にふけり遊興の事は人の心の赴きやすきものなる故、其まことなとり失ひ、此風にしたがひしかば、歌の風體あしく成り、人の心も誠なく國亂れ世かたむき、三皇終に遠國に遷されさせ給ひし也。古今序に、意動中詞顯外と云ひし事なれば、誠の心をもつて詠せば、その歌まことにして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもしたがへつべし。

二 夕されば門田の稻葉音づれて蘆のまる屋に秋風ぞ吹く

夕べになれば、門田の稻葉そよよ音信るゝかと思へば、蘆の屋へ秋風の吹入ると也。此外何の心もなし。かやうの歌を今の世の人さのみ賞翫せず、いかにと云ふに、新古今の歌のやうに花を飾りたる詞もなく、心をいひ残して深くむつかしく聞く心もなければ、聞えたる道とさりと見る故なり。たとへば、すぐに生延びたる木は見所もなしといへども、良材になるは根本すなる木の性也。くれり曲りて枝も延びかれてもちりゆがみたる



は木ぶり面白しといへども、其材にならず、木の性にそむけり。新古今の時代、帝をはじめ攝政大臣、定家家隆如きの名人出来て、古人の風躰を改め、花を専らに色を面白く詠み給ふは、今植木屋にて作り木をするが如く、すぐなる枝をまげて糸にてゆひつけ、枝を切り真木をゆがめ、さまざまの手入をなし、木振を見事に作り、人の目とくむるやうにこしらへ侍るやうなるもの也。人の心色にめで香にうつりやすき故、此風體を面白き事にうつり、歌の正風、感情のおもしろき事を賞翫せざるなり。此感情といふは、是をも草木にたとへば、獨活笋のたぐひも冬よりさまざま手入をなし、露をうち日にあて早く生じ出べき肥しをして、そのせいを以て生出で芽を出したるを初もの珍らしともてはやし食するが如し。尤も、うど、たかななれば、其味ひは有りといへども、天地のやしなひ其節を以て生ぜざる故、形はそれなりといへども、其風味のこまやかなるは無き也。其品々に依てこまやかなる風味は、とくと味ひてみるほど、こまやかなり。是を歌の感情と云。必ず口にて味ひ知るといふ計にもあらず、花の色を見るときも、色つや、りんのみほひ、手入にて咲かせたると、其時を得て自から咲たるは、目にても見わけ、其色のこまやかなるつやを心に味ひ、見事なるをおもふを感情と云ふ也。此感情を面白きと思ふと、色に心をうつし香にめで面白きといふは、一つ詞にして心は大きにかはれり。新古今の歌は、こなたさみせん伊達染の小袖、手がはりの仕出し物を面白きともてはやすが如し。是はあまねく人の心のより易き面白き也。又聖賢の道物にあうたる老士のはなし、理非分明なる評定など聞て、面白しと感情を起すは心ある人の面白きにて、是は稀なるべし。兵書に云、詞を飾り花麗を好む者は誠少し、是を弱兵といふ。詞すなほにして奢を慎む者は忠義の心有り、是を剛兵と云べし。定家卿のいはく、詠歌は心をいひとらむとすれば、詞を忘るゝ事有り、是實の

歌也。詞を思ふは必ず心たしかならず、是花也と云々。兵書に、人の心をみる教さまざまありて、敵の心を知りて、その心に應じて謀をなす。詠歌はおのれが心を以て言ひ出すものなれば、風躰によつてその心見ゆ。その心より出る風躰なれば、風躰をよくせんたくみても叶ふべき事にあらず。心の邪氣惡念を拂つて詠み出さば、風躰も宜しかるべしや。此夕されば門田の稻葉の歌をば、俊成卿定家卿も褒美ありし歌といへり。能因西行は歌の名人にて、此風躰を學ぶべしと書録にも書きのせ、口にもいひ教ふれども、心には誰も用ゐる事なし。此歌、夕さればといひ出したるより、門田の稻葉音づれて蘆の丸屋に秋風ぞ吹くとつゞきたる、詞すなほにして時節の景氣あはれにもさびしくも、感情骨髄にしみて、誠の秋風の身にしむ、やうなる歌なれども、秋風の音は琴三味、の音とはちがひたれば、面白くなく思ふもことわり也。

## 四、或はこまかに或は味ひある解釋の例

一 拾穂抄に、百歌のやは、捨やとて心なし。志賀の浦や、松島やの類なり、と云へり。此説あまねく人のいふ事なり。惣じて拾穂抄は、諸註又圖書などを集めて、その通に書き載せたるまでにて、吟味しては書かざる故拾穂抄の作者の誤にはあらざる也。右すてやといふに付て、呼出すや、といふ事をいふ。葛城や、小初瀬やなどを呼出すやと云。名所の名を云て、下にや文字を付たるにかはりのある事を不審させて、そこで右の五文字にてよみたる歌をいはで、秘傳秘説をさづけたりといはんため也。然れば、志賀の浦やと云ひて呼出す歌もあるべし。葛城やといひて捨やにもなる歌あるべし。此上に猶大事の呼出しとて秘決といふは、

櫻花春加はれる年だにも人の心にあかれやせぬ

此歌を、源俊賴の云、あかれやはせぬればあかるし也。櫻花の人の眺めにあかるしとは、賞翫する花の眺めの本意に背けり。あかれやはするにてあるべしと宣ひしに、定家卿の曰く、此櫻花といへるは呼出し也。櫻花と呼ばれて、櫻花がおつと答へてわが前に来る也。その時、やれ櫻花、聞け、今年は聞ありて、春も日數加はりたり、常こそ人にあかれぬ事なれ、せめて此春のやうに長き日數の時あかれよ、と云ひたる歌なり、と宣ひしといふ事あり。此歌は古今集伊勢が歌なり。それを俊賴の、あかれやはするにて有べしと宣ひしならば、俊賴は古今しらすといふべしや。定家の詞、なんの事もなき狂言にてこそあれ。とかう此段はいふべきやうもなし。此櫻花の歌は、古今に、

ことならば思はずとやは云ひ果ぬなど世の中の玉だすきなる

此歌のやは也。いかほども此手爾葉あれども、一首にてもことわりたち候故、長々しくはいらざるものと證歌多く申さず候。定家卿も俊賴も、是をしるしめまでこそありつらめ、か様の僻言どもの世に廣がりしをうたてく存じ候て、度々此僻言をしらへ申候へども、何とやらむ他をそしり申候やうにも聞え候はむと迷惑に存じ候。

二 わたの原八十島かけて漕いでぬと人には告げよ海士のつり舟

八十島とて名のある島にはあらず、八十氏、八百萬などいふと同じ。かすくの島の心也。さらぬだに海上は心細き事なるに、國を離れて荒き波風に船を浮べ、日數重ねて配所に至らむ心細き、いかばかり悲しくも哀れにも有べきにや。此心、身の有様を、哀なる親しき人にことづてたく思へども、勅勸の身なればそれも傳ふべきやうなければ、此有様を、せめて海士の釣舟に語らふさま也。上の五文字に、和田の原と云ひ出し、八十島かけて

漕出でぬといふ詞のあはれさ、言語道断也。篋が身に成りて此歌を吟すべし。

三 奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき

歌の心は、秋は萬物零落の時也。里にありても物悲しきに、殊更おく山の紅葉散る頃の寂しき哀れさ、心の中の悲しさ、中々言葉に述べ盡し難かるべし。その折節鹿の聲を聞たる、いか計りの心なるべき。秋はと、しかといひて、悲しきといへる、鹿の字なり。奥山の寂しき悲しさ、紅葉散る風の音、すべて時に應じてのあはれさ様々なれども、此山のみ秋なれば、眺め捨てし出づべき事にもあらず、猶堪ふる心ある頃、なく鹿の聲聞く時ぞ也。此ぞの字又眼字也。かやうに聞きて、感情あからす心に思ひこむるは、歌學得たる人なるべし。心に徹して面白からずば、歌學まだしき故と心得、猶學ぶべし。

四 村雨の露もまだひの楨の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

秋の夕べに村雨のうちそそぎ、楨の葉も露をもちたる折ふし、霧の立のぼるさまをよく思ふべし。面白くも寂しくもあはれも深くぞ侍るべき。

五 おもしろきといふに、人の心により品々あり。鼓太鼓にて打はやし、遊山玩水は心のうき立つ面白き也。鹽釜の浦の眺望すぐれたるゆゑ一入心とまるに、綱手漕ぐ船の行かよふさま、面白く見所多きは、哀れにもさびしくも心の沈みて感情の面白きを云。

## 十二 茂睡の眞蹟及び父母に就きて

茂睡が幼時父母と共に住みし下野黒羽なる、黒羽學校教員深澤秋吉氏に問合せ、同氏の盡力によりて、黒羽小學校長渡邊傳氏は、茂睡の兄なる渡邊明の後裔にして、茂睡が眞蹟にかゝる遺書二種を藏するを知り、借覽することを得たり。一は、表紙に、後人の筆もて梨本書と記せるもの、こは一話一言卷十四に、茂睡記と題して、その一節を引用せるもの、原書にして、(二八四頁参照、『茂妥がひとりごと』とは別の書なり)半紙本三十六枚に細書せり。本書は、

左の方の目尻がかよきに、(萬葉集第十一に、稀にみん君をみんとぞ左の手ゆみとるかたのまゆれかきつれ) 珍らしき人もやこんと思ひ、昨日は待ち暮らして、あたら日なもだになしぬ。今朝は又、まらうど鳥がこるくと鳴けば、(萬葉集第十四に、鳥とふ大なそ鳥のまさてにも來まさぬ君をこるくとぞ鳴く) 今日も一日またんとおもふ所へ、淺草より睡法師の、歳暮の禮にわたさといふ。昨日まじりのかよかつたはあはぬ事、けさの鳥は鳴き合せたるものよといひて、暫らく語るうちに……

と書きおこして、茂法師、睡法師、茂右衛門の三人を點出して、互に神儒佛及び武

士道の得失に就いて質疑問答せしめ、人道處世の大義を述べ、それを警句に富み趣味豊かなる雅俗折衷の文體もて記せるもの、結ぶに左の一節を以てせり。

加様に愚痴文官なる理もなき事どもを、心やすき中とて、日まかせに語り、夜もふけぬ、寒さも寒し。いざ寝やすまんとて、茂法師はさきになり、睡法師はあとにつきて、一つになつてふすまをかぶりたれば、茂も睡もふすま一つの中に有り。かゝる所へ茂右衛門も來りて、何とて我をばその中へ入れぬといへば、御身はさふらひにて、色々様々の事にうつりて、しづかなる我らが妨になるといふ。茂右衛門が云、まことに兩人ながら坊主なれば、我を邪寃と思ふは左もあるべけれど、今迄の物語のわけなれば、嫌はるべき我にもあらずとて、三人一つになりたると思へば、うへから見ればたゞふすま一つ也。

元祿七甲戌年霜月 日

こゝかしこに、日本紀、萬葉、徒然草等の和書を始め、佛書、漢書の類をも引用せり。茂睡が文才、學識、はた爲人も何がはれて、いと面白き書なれど、和歌とは縁遠ければ、割愛して他日別に論ずべし。特に注意すべきは、卷末に記せる左の文なり。

此書は、渡邊茂右衛門、法名茂睡と云ふ者の作也。茂法師と云ひ、睡法師と云ひ、茂右衛門と、名を三人にわけたるは、心意情の三つを思へるにや。茂と睡と一つになりて寢たるうちへ、茂右衛門を入まじきといひ

たるは、佛法にて情を断んと云心なるべしや。然れども、其佛法を用ざる故に、終に三人が一つふすまの中へ入たるなるべし。ふすまと云ふ心は、瓊々杵尊を天より下し給ふ時に、ふすまを以てつゝみ申たるといふ心にや。

幻高庵隱融書之

こは、筆勢本文と同じく、疑もなく茂睡の筆なり。これによつて、この最後に記せる幻高庵隱融、及び紫の一本古本待乳山の條なる幻隱庵高融（二七三頁参照）の、茂睡の別號にして、紫の一本の跋なる光融入道も、茂睡の別號なる事知られたり。従つて紫の一本の著者の、茂睡なる事を疑ひし説の誤なるよし（二七三頁参照）を明らかにし得たり。而して紫の一本の跋に、『櫻田にすみし光融入道所勞の頃』云々と記せる故は、南葵文庫本の跋に『版行せむ事を願ひ、時の奉行へ此卷を内談しければ、奉行衆御政有之、是は細かに譯ある本にて』云々（類聚名物考にもまかいへり）とある如く、江戸城をはじめ、市中の事どもを委しく書けることの爲に、憚りて假の名を用ゐ、かつ故人の遺著とやうにせしものと考へらる。

他の一は、『重代三文之銀寶錢之傳來當渡邊家之紋三文裏錢由緒』とありて、姉川の合戦の時の功によりて、東照權現より、銀寶錢三文を、渡邊山城守が拜領せし由緒を記せるものにして、終に、『元祿十<sub>丑</sub>年二月日、渡邊茂右衛門馮、法名梨本茂睡六十九歳書之』とあり。これによつて、茂睡がもとの名は馮にして、（渡邊氏は一家みな一字名を用ゐたり。二四六頁系譜参照）恭光といへるは、伯父戸田政次に養はれし後の名なること。而して又、彼の戒名を馮雲寺殿といへるは、その初めの名を頭に用ゐしものなることを知り得たり。（三〇〇頁参照）

茂睡の父母 渡邊傳氏所藏の渡邊氏系譜なる監物忠の條に、『寛永十<sub>酉</sub>年駿河落去以後、監物妻子殘らず、大關土佐守高増に御預、下野黒羽へ轉住す。土佐守合力五十人扶持を與ふ。慶安元成年五月廿六日黒羽に卒す。年六十四歳。號して宗光院殿固貫一堅大居士。大雄寺に葬る』とあり。これによつて、茂睡が父母に伴はれ那須に移りしは、寛永十年にして、二八八頁に九年とせるは誤なること、忠の歿年等、知られたり。

又大雄寺は大關侯の菩提所にして、黒羽田町にあり。忠の碑は、五輪石の苦むしたるにて、現存せりといふ。忠の妻は、系譜に、『延寶七<sub>未</sub>年九月江戸にて死す。號して清芳院殿高臺永壽大師といふ』とありて、二八九頁に、父母の死去等について推測せしことを、さだかにし得たり。

### 十三 元周の遺跡、茂睡の眞蹟寫本に就きて

茂睡の次男元周の住みし信濃南佐久郡南相木村の人猿谷義弘氏の好意によりて、一  
二知り得つる事あれば記す。

一、北相木村字久保に元和二年開基の禪宗松嶺山大龍寺現存せり。その過去帳に、  
徳岩道祐居士、元文二巳七月十一日歿、戸田勘右衛門とあり。即ち元周の死せる日を  
名家書畫談によりて八月十日とせる（二四七頁二四九頁）は誤なり。又、元周が墓は

不明なりと。

一、元周の妻は、北相木村井出善右衛門の女なり。その女、ゆるありて江戸にありし頃、元周之をめとりき。元周が相木村に移り住めりしは、その縁故にてなり。

一、元周が、父母及び兄三人の法要のために建てし碑、もと北相木村字向平にありしもの、天保年中、開墾の爲、字坂下井出氏の墓所に移され、そこに現存せり。三人の法名及び歿年月日を表に、辭世を裏に記せり。

一、猿谷氏、茂睡が眞蹟一卷を藏せらる。そは一條禪閣の代始和鈔に、宗祇及び兼俱の書添へしものを寫し、にて、貞享四年十二月二日書寫之、露寒軒法師茂睡、とあり。而してこれにそへて、貞享四卯年十一月十六日、大嘗會を行はれし儀式次第を記して、右者吉益豊滋以傳受書加之、貞享五辰年八月廿一日、露寒軒法師茂睡（花押）とあり。この書、單に茂睡が眞筆といふにとまれども、彼の職原口訣大事（二八三頁参照）及びこの寫本あるによりて、以て彼がかくの如き有職故實のことに、少なから

ぬ興味を有せりしことも知らる。又かの荷田在滿が大嘗會便蒙の著（在滿の著は、貞享再興後亦中絶して、元文三年に行はれし朝儀について記せるもの）の先縦をなせるが如きも、一奇といふべし。

#### 十四 茂睡の墓、茂睡と在滿に就きて

淺草高原町なる金龍寺に茂睡を葬りしことは、近世名家書畫談、茂睡考等に見ゆれど、その碑現存せず。（三〇〇頁参照）吉田令世の隨筆鵜舟のすさみの一節に、彼の釋萬葉集の事を掌りし板垣宗愔について記せる條に、『墓は淺草金龍寺にあり。茂睡が墓のむかひなり』とあれど、宗愔の碑また廢墓となりてさだかならず。そへていふ、茂睡の歿せし年に生れ、同じく歌論家たり、同じく大嘗會の儀式につきてゑるし、荷田在滿また、金龍寺に葬りしなり。奇縁といふべし。又鵜舟のすさみには、『江戸にありて、歌に後の世

のあしきくせをやぶりたるは戸田茂睡なり。』云々と記し、紫の一本の遺佚は、茂睡が別號なるべきこと、また類聚名物考を引きて、紫の一本の六卷本あることをいへり。

#### 十五 茂睡眞跡三十首並七首に就きて

『戸田茂睡』著書の解題のうちに、茂睡詠草としてあげたる（二八三頁参照）ものは、その頃、原書を見ることを得ず、近世名家書畫談、茂睡考等によりて記し、なるが、こたびその書を得たり。そは、茂睡眞跡三十首並七首と題せる、小形の折本一卷なり。大方は解題に記し、如くなるが、天保十一年にゑるせる橘守部の序文ありて、それによりて見れば、守部が、『古言まなびの新墾をせられにける』祖として、茂睡を慕ひしこと、まかも當時にありてすら、なほ茂睡については悉しく知られざりしこと、など知らる。三十余首の彼の作は、さばかりすぐれたりとも思はれず。

十六 正木のかづらに就きて (二六三頁参照)

水戸彰考館の藏書中に、清水宗川の選びし正木葛(二卷、同作者考一卷)あり。此書の成れる由は、法橋舟木(山本春正)の序に詳なり。曰く、

……こゝにもとつ人あり。大樹に仕へて、梓弓とり傳へたるたけき心はさるものにて、難波津淺香山に心を慰め、もはら齡も傾きぬれば、頭おろし、常陸のある海づらに隠れぬ。其はじめ、慶長の末つ方より今に至りて世に名たる人の歌、あるは物のふの八十氏人の上中下、あるは民の草葉の繁き道の奥まで……きよおける數多くつもりぬ。……早うより、此道に志深き人二人三人語らひて、これを選ぶ事八歳になりぬ。……十卷あまり二卷、名つけて正木のかづらと云……延寶二年三月十八日、序の言葉を加ふる事まかり。と。玄旨、勝俊、貞徳、光圀等をはじめ、當時の歌人の歌を選びしにて、茂睡の歌三首、山名光豊の歌七首載せられたり。

歌學論叢終

明治四十一年九月廿五日印刷  
明治四十一年九月三十日發行

定價金壹圓

歌學論叢附

著作  
所有

著者 佐佐木信綱

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 市川七作

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

歌學論叢正誤

- 四三頁 六行 古類聚抄の次に、歌林頁材集、二六頁 三行 和歌活の松の次に、藤爲兼卿類聚名物考の二部を加ふ
- 六一頁 一四行 仙覽は仙覽
- 三三頁 二行 嘉祿三年五月三日卒四十四の四十を削る
- 三四頁 九行 扶桑拾葉集は扶桑拾葉集
- 三二頁 二行 夙には夙く
- 二四頁 系譜 忠次の子某は忠清
- 二九頁 七行 今も高原町なる東陽寺の庭中にあり。覺の碑は、後に、近隣なる金龍寺に
- 二六頁 三行 和歌活の松の次に、藤爲兼卿傳、名家手簡の二部を加ふ
- 三五頁 七行 元祿二の下に、四月水戸家の庭園を見て記し、文一篇あり
- 三〇頁 七行 憑雲院殿は憑雲寺殿
- 三〇頁 四行 護入は護入
- 三〇頁 一行 泊泊舎は泊泊舎
- 三三頁 四行 おしへはをしへ
- 同頁 二行 なるしはおろし
- 四二頁 六行 醉人は醉人
- 四七頁 四行 嬉は嬉

日本歌學全書

○佐佐木氏編著目録○

發行所 東京 博文館

全 部壹冊金貳拾五錢●郵税金八錢  
 十二冊六冊金壹圓參拾錢●拾貳冊貳圓五拾錢  
 萬葉集八代集をはじめ、家集、百首、歌合、歌論等の書四十部を輯り、佐々木弘綱翁、佐々木信綱氏の標註を加へられしもの。紙數五千頁にわたれり。

續日本歌學全書

全 部壹冊金參拾五錢●郵税金八錢  
 十二冊六冊金壹圓九拾錢●拾貳冊參圓七拾錢  
 元祿以後の家集、撰集、歌論、百首、歌合、組行等、百四十七部を佐々木氏の編纂せられしにて、紙數六千三百頁餘。正續歌學全書合せて廿四卷、以て我國歌書の精華を網羅せるものといふべし。

和世々の跡

全一冊

國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採録せる書なり。和歌の小歴史として、作歌の模範として、また學校の教科用書に最も適當なるべし。こは佐々木翁の遺著なるを、翁が十七年祭の記念として、佐々木氏の撰なる近世歌人年表、和歌系統等を添へて出版せられたるもの。

歌おもひ草

全一冊

竹柏園主佐々木氏、願俗奔波の間に特立し、その操守を變ぜず、孜孜として斯道に盡さるゝ事多年。夙く國歌革新の旗幟を樹て、清新の想と馴雅の調と、その特色を發揮して、益々純固の域に至らむとす。おもひ草は、その十數年來苦心の作を集められしもの。あるは懐みある人の胸に限りなき慰藉を與ふべく、あるは險しき世路に活らきて安息を求むる人の心に美妙の調を傳ふべく、若しそれ延いては、歌壇の面目をも一新するを得べきか。



# 竹柏園集

第一編第二編定價金參拾五錢郵稅金六錢  
 心の強き人、弱き人、美しき人、清き人、さまたけ  
 の人相集まりて竹柏園といふ歌文の會は組み立て  
 られぬ。會員の中には、専ら詩の神に生運を献ぐる  
 あり。詩歌には、縁遠き職をたれる者あり、齒工あり  
 ヒヤンが人あり、山崎星の僧侶あり、廣き林檎  
 畑の主人あり、かづねの且歌の農夫あり、歌文を研  
 究せること既に數年、若くは消息の贈答に、歌文を  
 記せること既に數年、若くは消息の贈答に、歌文を  
 素より小冊子に過ぎずと雖も、或は歌文に心深き  
 人の友となり、或は寂しき旅旅の好伴侶たるべし。

# 上世歌謠の研究

我國和歌の歴史、最も興味あるは上世なり。然も  
 従來訓註釋以外に出でて、眞にこの時代の和歌  
 を研究せしむる人なし。佐々木氏夙年の題目に、東  
 京帝國大學文科大學に講せられたり。この題目に、東  
 草稿に修正を加へ、日本歌史第一編として、世に公  
 けにせらるれば、言を俟たじ。

# 日本歌選

上下二千載、千を以て數ふべき幾多の選集、家集、  
 より、各作家各時代を代表すべき作品を選出して、  
 わが國歌の精髓を示さむとするもの、この日本歌  
 選なり。この上に、上古の巻成りて、刊行せらる。即  
 ち上世歌謠史の第一期第二期の紀元前より天武帝  
 までの歌謠を輯録す。而して特に本巻は、諸書を渉  
 獵して、當時に屬するものを普く收め、添ふるに  
 年表、参考書目を以てし、かつ上古歌謠史の概観を  
 載す。國文學を研究せむとする人の必須の書なり。

# 歌高

# 潮

思草の後、佐々木氏の歌集は、いかに變轉し、いかに  
 新面目を展かむとしつゝありや。それを示せる集也。

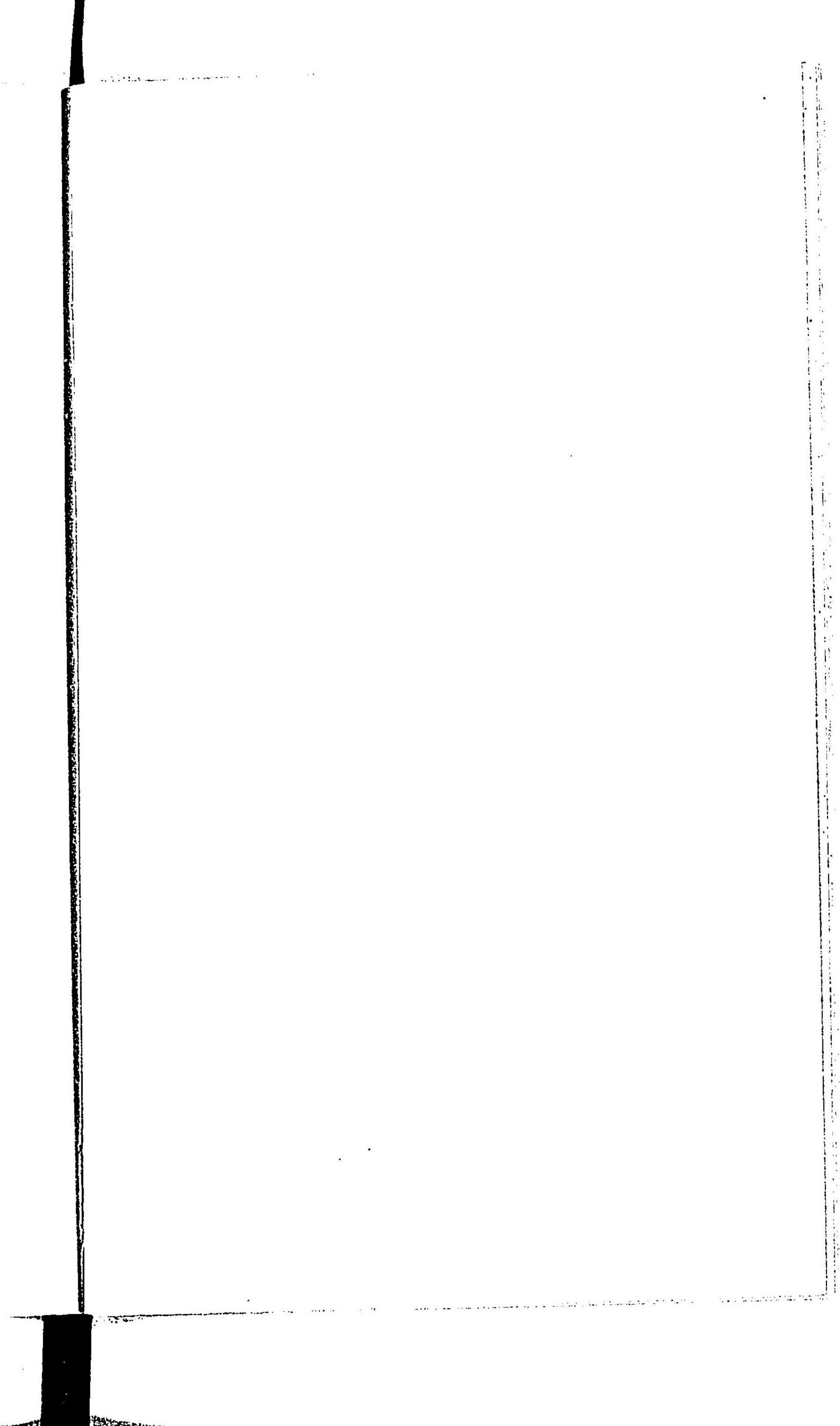
# 游清吟藻

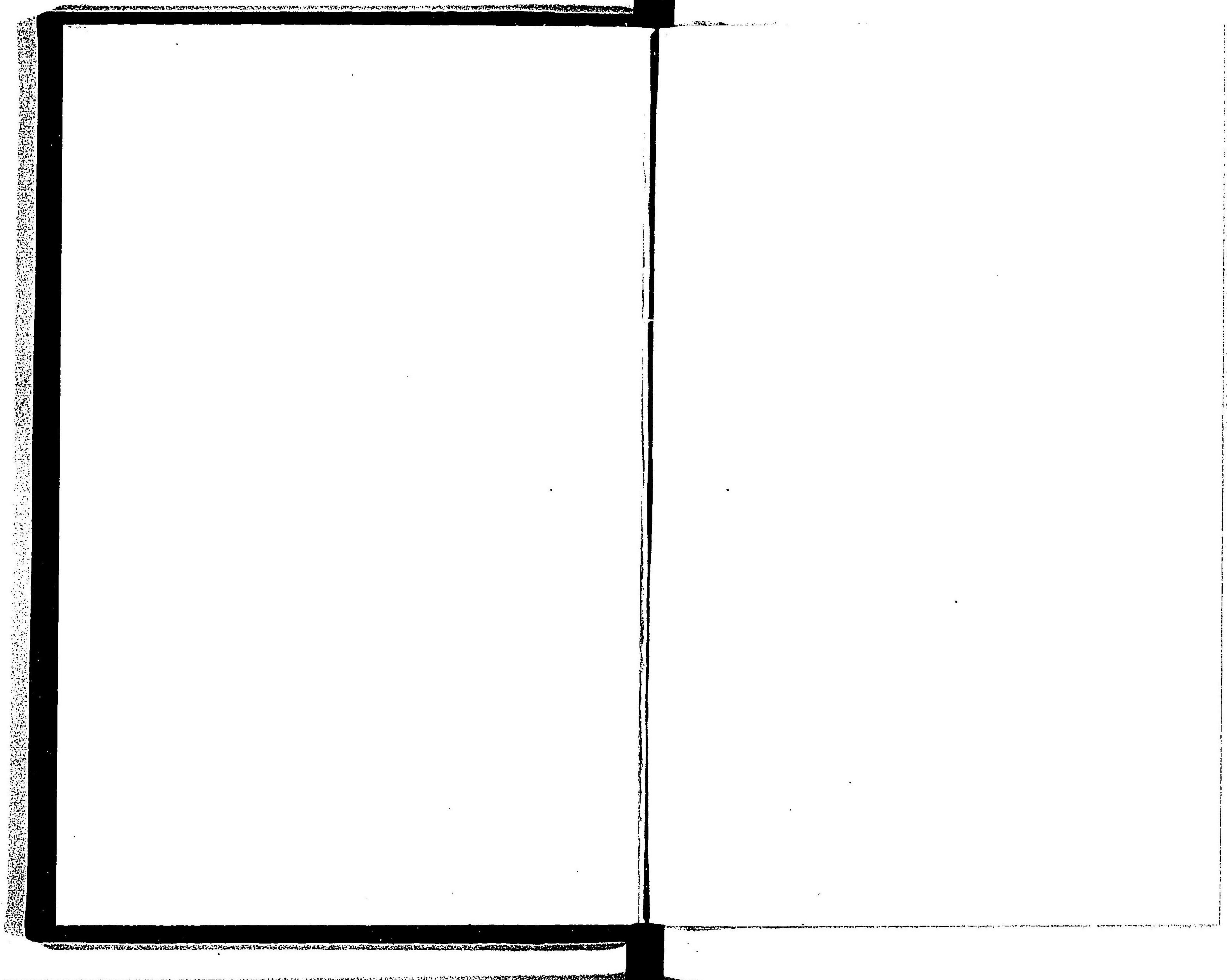
竹柏園主が、南清に遊び、長江を溯りて、感らし來ら  
 れし歌集なり。上下幾千年の詩人が、錦心を儲まし  
 めし、洞庭の勝、金陵の景は、いかにわが歌人の眼に  
 映せしかと思ふに、世人は、いかにわが文壇に、麗  
 らざりたる。此朽もせぬつゝを喜ぶべし。

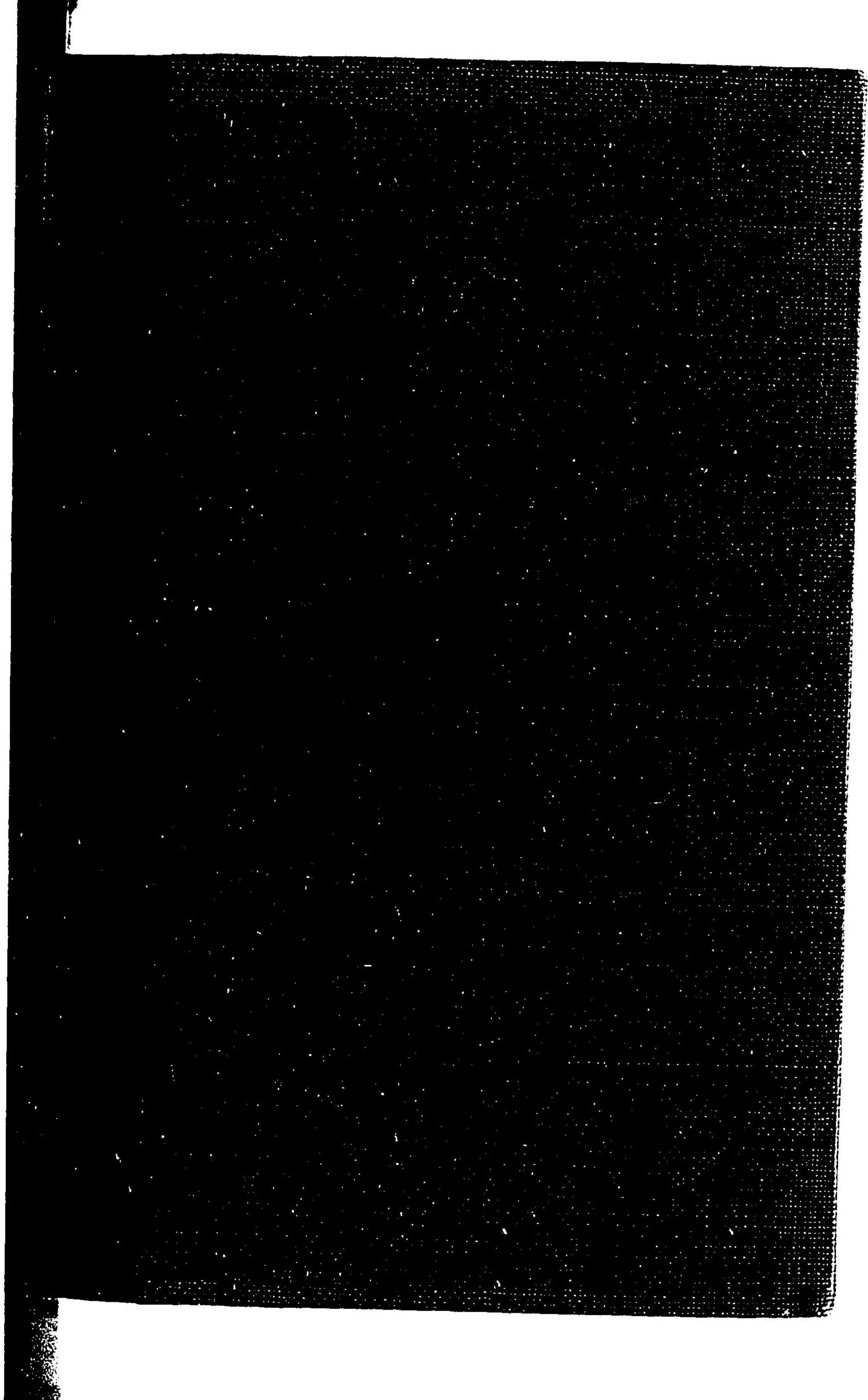
全近 冊一

全近 冊一

全近 冊一







911.104

Sa682k

085772-000-7

911.104-Sa682k

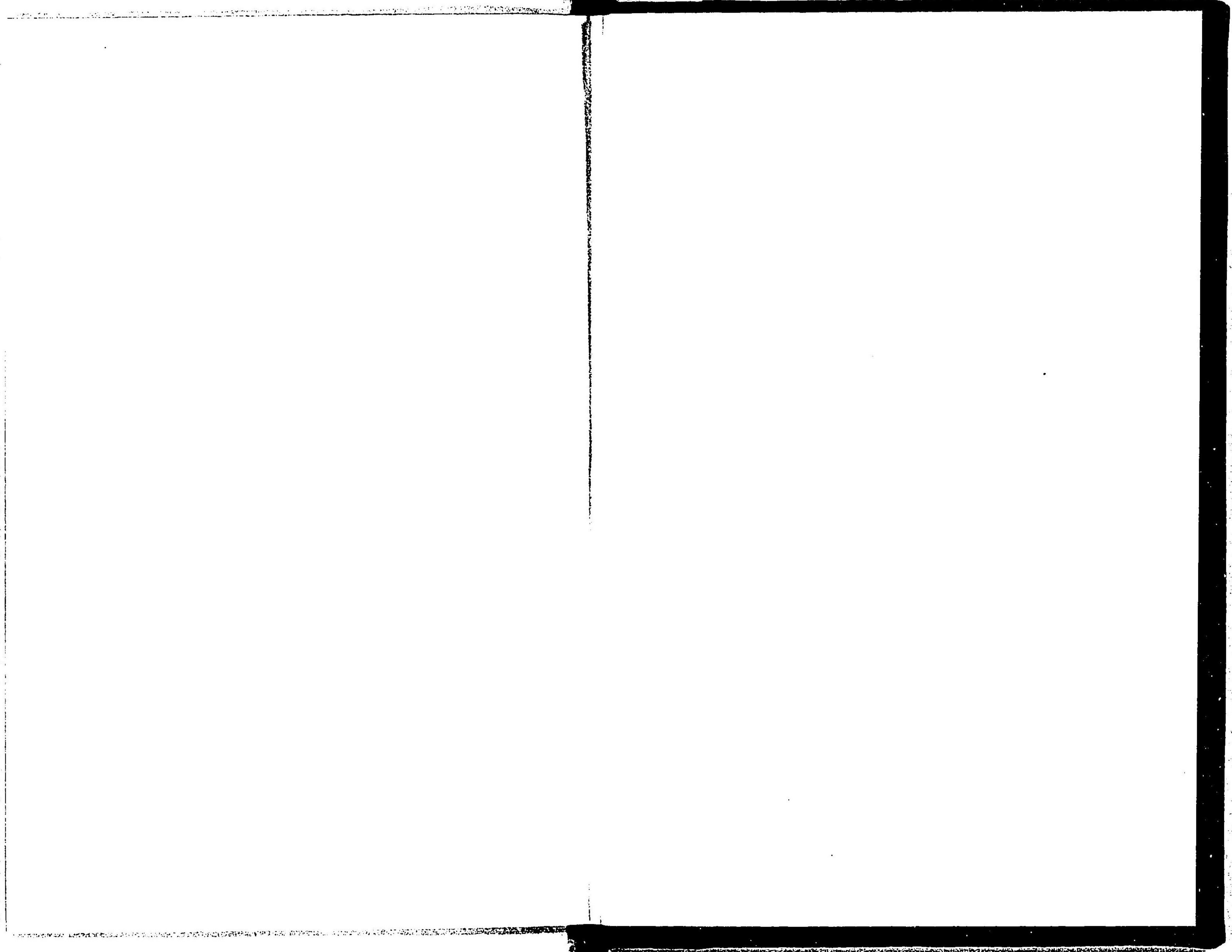
歌学論叢

佐々木 信綱/著

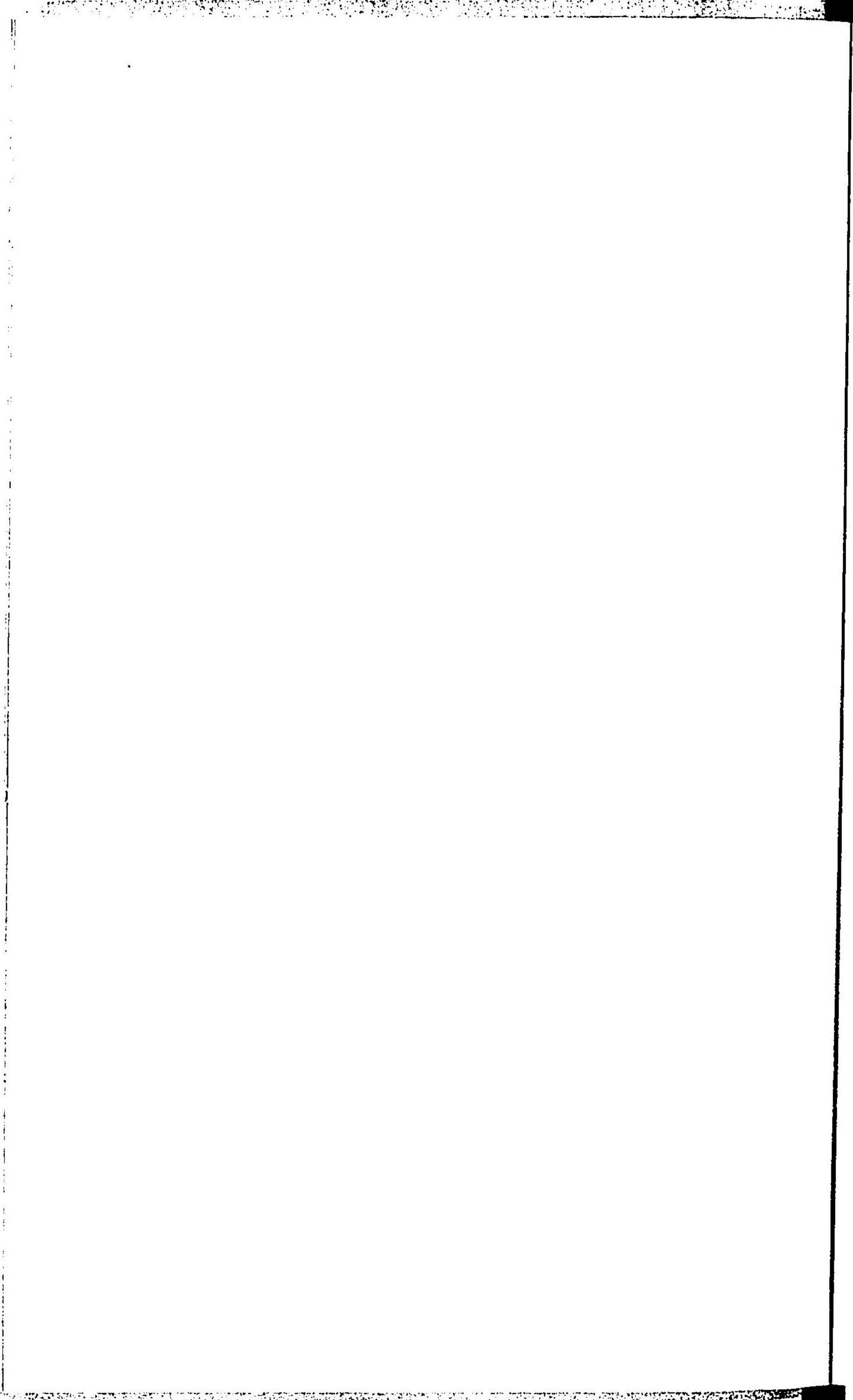
M41

DBD-0295





1880



2